

42046

教科書文庫

4
810
41-1933
200030
2350

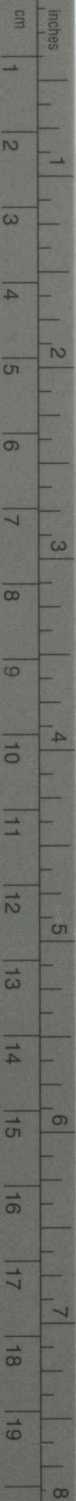
S.8  
1933

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

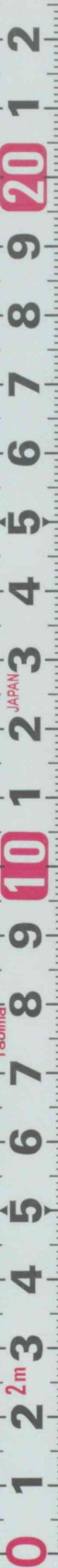
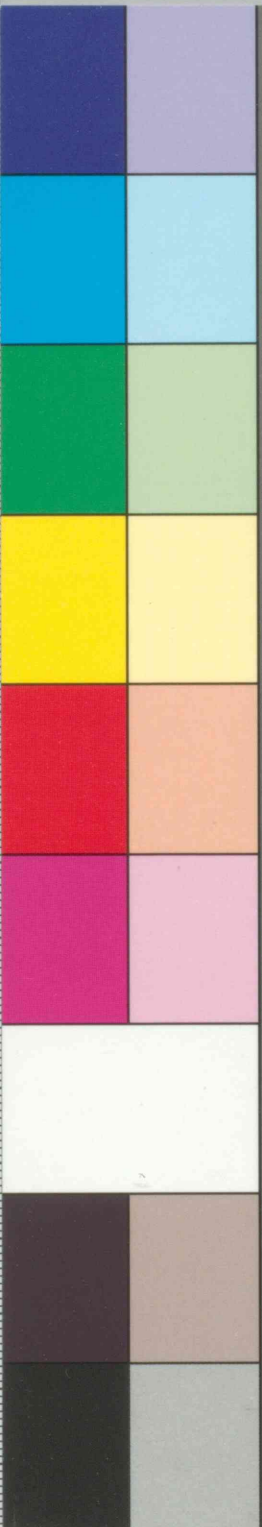
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759  
Iq1  
資料室



純正國語讀本

女子編



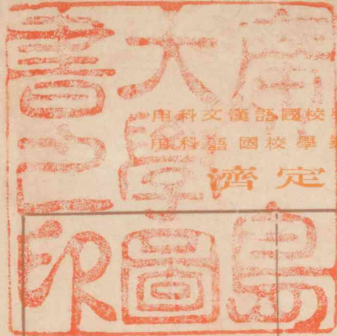
巻十





資料室

3259  
I91



昭和八年二月二十一日  
昭和八年九月一日  
教育部定濟

文學部五十年史の編



純正國語讀本

司馬田大先生宛



(照參 遷左 公管)

(藏社神野北都京) 圖の居謫異道



道真論居の圖

これは「北野縁起繪詞」卷四卷の一部で、京都北野神社の所藏である。神社は云ふ迄もなく菅公を祀つた社である。

圖は、延喜元年九月十日の夜、道真が太宰府の論居に於いて、恩賜の御衣を拜しつゝ、遙かに土上離間天皇を偲ひ奉つてゐる處で、前年の昌泰三年九月十日の夜、清涼殿にて親朝の御宴に侍した事、同じ日の朝、「君當春秋臣漸老。風無涯岸報猶遲。」と云ふ詩を上つて御衣を賜はつた事などを思ひ出でて、「去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在。此。捧持毎日拜。餘香」と詠じたのはこの時であつた。圖の向つて最左端に、袷衣に指貫を着て、左の手で顔を掩つてゐるのが菅公で、恩賜の御衣は御紋章のついた箱の中に見られる。筆者 傳藤原信實。

純正國語讀本卷十

目次

一 忘我遊神同化その一	坪内逍遙	二
二 忘我遊神同化その二	坪内逍遙	六
三 幻住庵記	松尾芭蕉	九
四 芭蕉の事	島崎藤村	二三
五 老の姿はかはるとも	近松門左衛門	二四
六 智恵の振賣	井原西鶴	三一
七 大丈夫の覺悟	幸田露伴	三六
八 旅より		四一
九 菅公左遷	(大鏡)	四六



一〇 『枕の草紙』から…………… 西

一一 紫式部と源氏物語…………… 七

一二 法成寺の造營…………… (榮華物語)…………… 七

一三 庭園に現はれたる我が國民性…………… その一…………… 本多靜六(據)…………… 八

一四 庭園に現はれたる我が國民性…………… その二…………… 本多靜六(據)…………… 九

一五 古事記三章…………… (古事記)…………… 九

一六 いやつぎに…………… 101

一七 須磨の秋風…………… (源氏物語)…………… 106

一八 愛…………… 網島梁川…………… 110

一九 本阿彌光悦…………… 野口米次郎(據)…………… 114

二〇 泣かざるべけんや…………… 細井平洲…………… 119

二一 萬葉集に現はれたる純眞愛…………… 113

二二 大隈重信…………… 中村吉藏…………… 114

二三 東西文明の比較…………… 大隈重信…………… 117



目次終

純正國語讀本 卷十

一 忘我遊神同化 その一

坪内逍遙

坪内逍遙  
文學者  
文學博士  
早稻田大學名譽  
教授  
名は雄藏  
昭和十年歿  
年七十七  
心が陶然として  
酔つたやうにな  
る。之れを刹那  
の忘我と名づけ  
る。

自分の趣味性に適つた藝術に接すると、少なくとも其の當座暫らくは、心が陶然として酔つたやうになる。之れを刹那の忘我と名づける。名畫に見入り、上手な音楽を聴き、又は面白い演劇などを見る瞬間の感じがそれである。

或は曾て一度もさういふ經驗は無いといふ者もあらうが、それは生得趣味性が極めて鈍いか、若しくは鑑賞上の修養が足らないからであらう。藝術品が高尙過ぎて趣味を感じしめぬことはある、見馴れ聞き馴れてゐぬ爲めに聯想が起こらず、随つて深い味



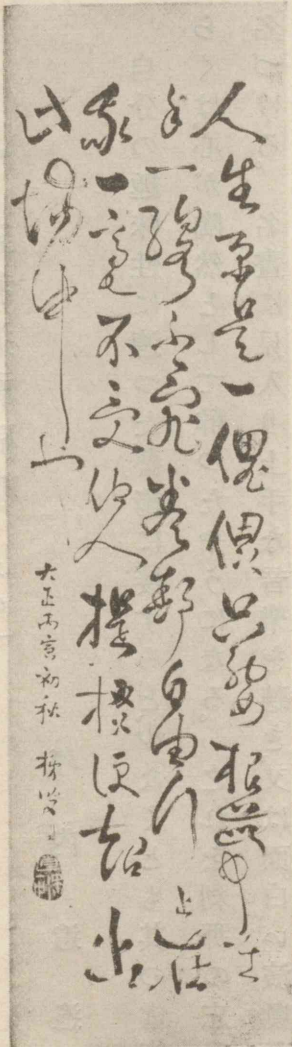


苟も藝術と稱する限りは、少なくとも忘我作用は勿論のこと、それ以上の効能をも有する例が多い。

人生原是一傀儡。只要根帶在手、一線不亂、卷舒自由、行止在我。二毫不受他人提撥、便超此場中也。  
大正丙寅初秋 梯叟

忘我以上の作用を遊神といふ。

はひが解りかね、それで興を覚えぬこともあるが、如何なる藝術品にも曾て何等の面白味をも感ぜぬといふは自然でない。又畫にもせよ、音樂にもせよ、其の他の藝術にもせよ、未だ曾て如何なる種類の人間をも、婦人小兒をも曾て恍惚とさせたことのないといふやうなのがあらば、それは名のみの藝術である。苟も藝術と稱する



坪内逍遙筆蹟

る限りは、少なくとも忘我作用は勿論のこと、それ以上の効能をも有する例が多い。

忘我以上の作用を遊神といふ。これは當の藝術を鑑賞する其

藝術が供する感興の筏に乗つて、我れ知らず情の悔に浮かび出でて、心が別天地に遊ぶのである。

の刹那、其の瞬間だけ、心が恍惚となるに止まらず、譬へば碁將棋好きの者が勝負に夢中になるやうに、其の當座暫らく、時としては其の後二三時間、長い時は其の晩一晚、甚だしきは三日も、四日も、どうやら夢でも見てゐるやうに惘ぼんやりとなつてしまふことをいふ。「能の後三日」とは此の經驗をいつたものであらう。「三月肉の味はひを知らず」とあるのも、此の心持ではあるまいか。藝術が供する感興の筏に乗つて、我れ知らず情の悔に浮かび出でて、心が別天地に遊ぶのである。屑々營々たる現實界を離れて、一種理想的な空な世界にさまよふのである。かういふ心持にならせるのが藝術の微妙な特色で、忘我作用に止まるうちはまだく低い。力ある藝術とは稱しがたい。

しかしながら藝術の作用は同化に至つて極まる。作用の遊神に止まるうちは、言はゞ尙ほ腰がすわらないので、いつ現實へ戻つ



て來るかも知れぬ。遊神は夢を見てゐるやうなもの、よしや其の當座は藝術の微妙な力に魅せられて、心がどんな飄逸な、高尚な、乃至美麗な世界に遊んでゐようとも、穢い、騒々しい現實の聲に叩き起こされて、其の夢が破れるが最後、後はもう元の木阿彌で、水に書いたお題目が消えたやうになつてしまふ。加ふるに、時勢の必然として此のたぐひの夢は醒め易い。

誰れも經驗のあることであらうが、とかく幼少の時にはどんな奇怪な夢を見ても、少なくとも見て居る間は、先づ夢とは心附かず、現と信じて居る。然るにおひ／＼成長し、自意識が發達して來ると、夢も次第に穩かでなくなる所から、夢の最中に夢だなど心附くことが多くなる、で夢が早く破れる。丁度それと同じで、めい／＼の自意識の鋭くなつた二十世紀の今日は、高が夢を見させるを最上の目的としたやうな藝術では、逆も長く遊神させることは出來

これは夢ではない、現だとまで深く切に同感せしめて、藝術か、現の人生か、辨別の附かぬ程に同化せしめねば物足らぬのである。

ない。これは夢ではない、現だとまで深く切に同感せしめて、藝術か、現の人生か、辨別の附かぬ程に同化せしめねば物足らぬのである。偏に技巧や空想に依る藝術が、昔の如く歓迎せられぬのは、此の道理にも因るのであらう。現實をありのままに寫すといふ自然派の作品が喜ばれるのは、もとより他にも仔細はあるが、其の一面の理由は、同じく夢には相違ないが、成るべくは現によく似た夢を見させ、暫らく夢といふことを忘れさせ、以て遊神の作用を續けさせたいといふ内心が、作者にも鑑賞家にも隱約の間に有るからであらう。わろく言へば、人の心がせゝこましくなり、世智辛くなつて、夢を夢として樂しむことが出來なくなつたのであるが、善く言へば人の鑑賞力や慾望が大きくなり高くなつて、やがて見ざめのするやうな淺はかなものには満足を感じぬやうになつたのである。



## 二 忘我遊神同化 その二

坪内逍遙

それはともあれ藝術の效用が尙ほ遊神に止まつてゐるうちは何となく物足りない。よく人生は短し、藝術は壽しといふが、それが古今幾何の藝術の上にあてはまるであらうか。英雄豪傑の偉業は、槿花一朝の榮で、星霜を経た曉には概ね空しく山丘と化してしまふが、特り文學者、藝術家の大作品は彼の屈平の詩賦と共に長へに日月を懸くといふは、果たして事實であらうか。成程長く玩賞せられて一時の忘我用や遊神用に供せられる位のことはあらうが、只だそれだけとすれば、果たしてそれは六尺の男子が心血を濺いで、五十年の壽命を三十年に縮めても刻苦經營すべき一大事であらうかどうかが疑はしい。宗教か、育英か、社會改良か、政治か、

屈平  
字は原  
楚の懷王の臣

其の作用に於いて忘我遊神以上に幾段を進めて、是非とも他を同化せしむるといふ力を具へぬうちには、眞の藝術と稱するに足らぬといふのである。

實業か、にたづさはつて、少なくとも一國、一代のために身を獻げた方が或は立派ではないか、生れがひのある仕事ではないか。かういへばとて、文學、藝術は必ずしも常に教化を目的とせねばならぬといふのではない。況んや實用的にせよとはいはぬ。今は目的を論ずるのではない、只だ其の作用に於いて忘我遊神以上に幾段を進めて、是非とも他を同化せしむるといふ力を具へぬうちは、眞の藝術と稱するに足らぬといふのである。

蓋し、同化作用を有する藝術に觸れた時は、人は其の刹那に於いて我れを忘れ、其の當座幾ばく時か現實を超脱して、さながら別天地に旅行するやうな思ひがあり、剩へ其の旅行から歸つて後も、どうやら我が性癖が一變したやうな感がある。譬へば、催眠術で精神療法を行つた不良少年などの場合に似た心的現象が生ずる。穢かつた心が自然に美しくなり、荒々しかつた心が自然に優しく



藝術の内容と自分の心とが融會して一つになつてしまふ。

藝術の力は能く風を移し俗を易へる。

なる。めいつた心が引き立つ。快活にもなり、嚴肅にもなる。一口にいへば、當の藝術の内容と自分の心とが融會して一つになつてしまふのである。狭い現實界以外に、若しくは以上に、一つの常住の別世界が出来て、何となく我が心に餘裕が生ずる。所謂心廣く體胖かなどいふ心状態で、さうして時を経るうちには、自然の勢ひで、其の心状態を自分以外の者にまで及ぼしたくなる。今度は逆さまに、現實界を件の藝術界で經驗する其の味はひと同じものにしたくなる。いや、さうせねば殆んど安心がならぬやうにもなつてゆく。こゝに至ると、宗教家に似た態度となり、強ひて勸化門を開いても世を擧つて同一味に化せしめたくなるのである。併しながら所謂同化作用は、或は高く、或は卑く、何れの方面にも向ふ。善化の用をもすれば悪化の用をもする。藝術の力は能く風を移し俗を易へる。彼の健全ならざる藝術が風俗を壞るの理も、之れ

を推して考ふればおのづから明瞭であらう。古の賢明な統治者は、言ひ合はせたやうに、樂の正雅を貴び淫哇を惡んだ。音樂の人心を動かすことは最も廣く且つ深いからであらう。其の理は移して以てあらゆる藝術の上にも適用せらるべきである。

### 三 幻住庵記

松尾芭蕉

芭蕉  
元祿の俳聖  
松尾宗房  
伊賀の人  
元祿七年歿  
年五十一  
麓に細き流を渡りて、翠微に登ること、三曲二百歩。

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流れを渡りて、翠微に登ること、三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ思むなることを、兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとど神さび、物しづかなる傍らに住み捨てし草の戸あり。蓬、根、笹、軒を



幻住老人

膳所侯家士  
本多氏八郎左衛門、號を探山居士といふ。

奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩みくるしき北海の荒磯に踵を破る。

魂吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。

圍み、屋根漏り壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云ふ。主の僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八とせばかり昔になりて、まさに幻住老人の名をのみ残せり。予また市中を去る事十とせばかりにして、五十年や、近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛め家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩みくるしき北海の荒磯に踵を破りて、ことし湖水の波に漂ふ。鳩の浮巢の流れとゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の、やがて出てじとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲き残り、山藤松にかゝりて、時鳥しばく、過ぐる程、宿かし鳥の便りさへあるを、木つゝきのつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申に峙ち、人家よきほどに隔たり、南薰峰よりおろし、北風湖を浸

笠取

山城

士峰

不二山

田上山

近江

ささふ(篠生)

近江栗田郡

黒津

近江田上山の麓



して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂る、舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水鶏のたゞく音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は士峰の梯にかよひて、武藏野のふるき住家も思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。ささふが嶽、千丈が峰、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、あじろ守とよみけん萬葉集の姿なりけり。なほ眺望くまなからんと、うしろの峰に這ひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づく。たましく心まめなる時は、谷の清



高良山

筑後、僧正は連  
臺院主一如僧正

甲斐加茂の祠官  
藤井甲斐守敦  
直、能書家

夜坐靜かに月を  
待ちては影を伴  
ひ、燈を取つて  
は罔兩に是非を  
こらす。

水を汲みて自ら炊ぐ。とくくの雫をわびて、一爐の備へいと輕し。はた昔住みけむ人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみ置ける物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物納むべき處など、いささかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此の度洛に上りいまそかりけるを、ある人をして額を乞はしむ。いとやすくと筆をそめて、幻住庵の三字をおくらる。やがて草庵の記念となしぬ。

すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれくとぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、あるは里のをのこども入り來りて、猪の稻食ひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我が聞き知らぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶる

或時は仕官懸命  
の地を羨み、一  
度は佛籬祖室の  
扉に入らむとせ  
しも、たよりな  
き風雲に身をせ  
め、花鳥に情を  
勞し、無能無才  
にして、此の一  
筋につながる。

に閑寂を好み、山野に跡を隠さむとはあらず。や、病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。つらく年月の移りこし拙き身の科を思ふに、或る時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫らく生涯のはかりごととさへなれば、終に無能無才にして、此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずやと思ひ捨て、臥しぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立

〔一葉集〕

### 四 芭蕉の事

島崎藤村

芭蕉の生涯は旅人の生涯であつたばかりでなく、漂泊者の生涯



芭蕉の生涯は旅人の生涯であつた、漂泊者の生涯であつた。

であつた。「漂泊の思ひやまず」と、道の記の中に力強く書いてあつたと思ふ。芭蕉に行かうとするものは、あの言葉の光を捉へることを忘れてはなるまい。

やがて死ぬけしきは見えぬ蟬の聲

この句は漂泊者の精神の光景を指摘して見せたやうで、何となく胸に迫る。

牧草を追ひ、住處を定めなくて、曠野を漂泊するは露西亞人の運命であるといふことが、露西亞人自身の手によつて記されたのを讀んだことがある。私達の住む土地は、やがて私達の天性を造り出したのであらうか。半ば熱帶的な日光と、一年に一度は、きまつてやつて来る霖雨と、さうでなくても多量な雨と、秋季の氾濫と、烈しい風と、強い濕氣と、休息することを知らないやうな地震と――

斯う數へて來ると、私達の親しむ自然で無常迅速の思ひをそゝらないものはない。深川の大火に逢つて、漂泊の思ひが一層強くなつたといふ事は、芭蕉の書き残したものに見えるやうである。

芭蕉は精神上の旅人でもあつた。西行へも旅し、定家へも旅し、萬葉の諸歌人へも旅し、李白へも旅し、杜子美へも旅し、寒山へも旅した。漂泊に徹したこの詩人は、一步は一步より、動搖の上に靜坐する精神的の生活を創造して行つたやうに見える。

漂泊は芭蕉の心を活かした。それと同時に、芭蕉の肉身を傷めたものもまたその漂泊の生涯ではなかつたらうか。奥の細道の旅には百六十日を費し、その里程は六百里に上ると傳へてある。

旅癖や寝冷煩ふ秋の山

幻住庵での句とあるが、この旅癖の重なり重なつたものが、やが

漂泊に徹したこの詩人は、一步は一步より、動搖の上に靜坐する精神的の生活を創造して行つたやうに見える。



て大阪の道修町で病臥するやうに成つて行つた、その下地ではなからうかと思ふ。

十曲川 藤情の歌

小諸ある古城のとなり。老をゆく遊子悲しむ。緑のす  
たへは昔も若草も若くも。あかかろ余の  
閑遠。日は流れて流るる。  
あたゝかき光はあれど。野に満つる香りも知らず。  
床のひきはそ段を。夢のまじりも青し。藤人の群  
はいくつか。白中の道を。心ざぬ。  
さるれゆけむ。藤間もええ。歌衣は佐久の草笛。  
十曲川のさよふ波の。岸近き指の。濁り  
酒濁れる。飲めて。草枕し。かきさむ。

十曲川

える。さすがに芭蕉は囚はれて居なかつた。飽くまで、日常生活

芭蕉は日常生活の細目に精通した詩人であつた。

島 海土の家は小海

藤 老にまじるいと

村 どかな

筆 芭蕉の句の細みとい

蹟 ふものは、斯うした細目

に精しいところから養はれて來て居るかに見

芭蕉は飽くまで  
日常の生活に立  
脚して、そこか  
ら立派な創作を  
つかみ出した。

に立脚して、そこから立派な創作をつかみ出した。どうかすると象徴的な境地にまで句作を押し進めて行つた。それも理のあることだと思ふ。何故かなら、芭蕉は細かに日常の生活を味はつたばかりでなく、幻想を抱いた詩人であつたから。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

よく見れば薺花さく垣ねかな

我がきぬに伏見の桃の雫せよ

芭蕉の感情の優しさが私達の心を捉へる。その感情のやさしさは處女の持つもののそれに比べたいとさへ思はるゝほどである。

牡丹蕊ふかく分け出づる蜂の餘波かな

白げしにはねもぐ蝶のかたみかな

これらの句を見ると、濃情の域を立ちこえて、感覺的な香氣を放



芭蕉は感覺的  
で、そして複雑  
な感情の陰影を  
見せて居る。

Humour

つとところまで行つてゐる様ではないか。これを良寛に思ひ比べ  
ると、芭蕉はもつと感覺的で、そして複雑な感情の陰影を見せて居  
る。芭蕉の詩は、たましひの詩であるとは言つても、斯うした感覺  
的のものが色濃く露出して居て、どうかすると私達の感覺にまで  
迫つて來ることを見逃せない。

私は藝術上の感銘を言ひあらはす場合に、人格といふ言葉を避  
けたい。人格といふ言葉は、批評の行きどまりのやうな氣がして  
ならない。藝術は要するに人格だと大まかに言つてしまへば、そ  
れ以上、どうにも動きがとれないかと思ふ。これは芭蕉の事を言  
ふ場合にもあてはまる。

俳諧といふ言葉が、ユーモアもしくはユーモアのある文學と解  
していゝだらうと思はれる。これは、支考の『十論』などを讀んだ頃

Humour

から、何時となく私には先入主となつてしまつて居る。試みに貞  
徳あたりから創まつた滑稽文學に思ひ比べて見たまへ。俳諧と  
いふ言葉一つにも、蕉門の諸詩人が全く別の意味を賦與したかの  
趣があるではないか。

あふみや玉志亭にして、納涼の佳興に瓜をもてなして、發句  
を請うて曰はく、句なき者は喰ふ事あたはじ、と戯れければ、

初真桑四つにや斷たん輪に切らん

この好いユーモアが芭蕉の初期の作に散見するやうな浅い滑  
稽から深められて行つたかと思ふと、むしろ驚かれる。

芭蕉は、子供を注意して見よと、その弟子に教へたといふ。芭蕉  
が子供の友達であつたことは、數々の句がそれを證據立てゝ居る。  
雪の日に兎の皮の髭作れ

芭蕉が子供の友  
達であつたこと  
は、かす／＼の  
句がそれを證據  
立てゝ居る。



いざ子供走りありかん玉霞

これらはその著しいものであるが、よく見れば芭蕉の書いたものには温い童心が溢れるばかりにある。

芭蕉が子供の友達であつたといふことは、一面に孤獨な生涯を送つた人であるといふことを語つて居る。

良寛は老年になつて手毬をついて遊んだ。芭蕉は獨り居て水鶏笛などを吹いた。よほどの寂寞と孤獨とを経験した人達でなければ、手毬をついたり、水鶏笛を吹いたりして、心を慰めるところまでは行かまい。又、その経験もなかつたなら、あれほどの子供の友達にもなるまい。

しかし、孤獨であつた爲めに天分を伸ばすことも出来、その離れ

寂しさに居た芭蕉は、その寂しさを主とし友としたり。それ位孤獨に浸り切るほどの強さをもつた芭蕉は、實に涙の多い五十年の生涯を送つた。

た位置から人生の遠近を見透すことも出来、その寂しい境涯から暗い宇宙を探ることも出来たのは芭蕉だ。

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな  
寂しさに居た芭蕉は、その寂しさを主とし友とした。それ位孤獨に浸り切るほどの強さをもつた芭蕉は、實に涙の多い五十年の生涯を送つた。

蛸壺やはかなき夢を夏の月  
手を打てば木魂に明くる夏の月  
月はあるけれど留守のやうなり須磨の夏

芭蕉の夏の句には名状しがたいほどの心の深さを見せたのがある。そこには、現實と幻想との混淆がある。この世の深い空虚があらはされて居る。



芭蕉には解りにくい句が多い。これには短い詩形の約束から来て居るものもあらうし、もう死んでしまつた言葉の不可解なところから来て居るものもあらうし、その他種々な理由から来て居よう。彼れの句が説明でないのも、その解りにくい理由の一つであらう。私は自分に感知し得る程度にとめて、解らない句を解らないなりに繰返して居る。でも、題詞を見つけた爲めに、その句の浮かんで来ることはよくある。

秋深き隣は何をする人ぞ

芝柏興行の題詞がなかつたら、またこれが自宅でなしに他の家で浮かんで来た詩情といふことが分明でなかつたら、この句を詠じた時の人の位置は、まことに動き易いものとなるであらう。

芭蕉の句の解りにくいのは、結局物を言ひ切つてしまはないところに落ちて行く。言ひ切るな、言ひ切るなとは、弟子に教へた芭

Ibsen  
(1828-1906)  
ノルウェーの詩  
人、劇作家

蕉の言葉としても残つて居る。すつかり自己を語らうとするやうな人は話せないとまで言ひ放つた、イブセンのやうな藝術家すらもある。芭蕉の句が解りにくいのみでなく、芭蕉その人が物を言ひ切つてしまはないやうな、まことに解りにくい人ではなかつたらうかと想像される。

何と言つても、芭蕉の旅情を直接に詠じたものには詩人としての特色が最もよくあらはれて居る。道の記に挿んである旅の句は、みな好ましいものばかりだ。

あか／＼と日は難面も秋の風

芭蕉のいふ、鏝元に切りこむとはこれだ。その切實な感じは直ちに私達に迫つて来る。

馬をさへながむる雪のあしたかな



近松門左衛門

淨瑠璃作家  
杉森信盛  
享保九年歿  
年七十二

仁ある君も

慈父不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>愛<sub>ニ</sub>モ

無益之子、仁君

不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>無用之

臣(曹植)求<sub>ニ</sub>

自試(表)

甘輝

韃靼に降りしが

後に叛きて鄭芝

龍に應ぜし明の

將軍

聞きしにまさる

要害はまだ牙え

返る春の夜の、

霜に閃く軒の瓦

鯢魚天に鱸ふり

て、石壘高く築

き上げたり。

旅人が旅人を眺めた心持は、この句などによくあらはれて居ると思ふ。

### 五 老の姿はかはるとも

近松門左衛門

仁ある君も用なき臣は養ふこと能はず、慈ある父も益なき子は愛すること能はず。大和唐土さまく、に道の巷は別かるれど、迷はて急ぐ誠の道赤壁山の麓にて、親子三人めぐり逢ひ我が聾とばかり聞き及ぶ、吳常軍甘輝がやかた、獅子が城にぞ着きにける。聞きしにまさる要害はまだ牙え返る春の夜の、霜に閃く軒の瓦鯢魚天に鱸ふりて、石壘高く築き上げたり。濠の水藍に似て繩を引くが如く、末は黄河に流れ入り樓門かたく鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧しく、箭窓に弩隙間なく、所々に石火矢を仕掛け置き

一官  
鄭芝龍、明末に出で、明の興復を圖りし人。

娘

錦祥女  
甘輝の妻

和藤内

鄭芝龍の子成功、國姓爺と稱す。明の忠臣。

一身の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟の前、遂に見ぬ舅よ聾よと親しみだてして、

すはといは、打ち放さん其の勢ひ、和國に、目馴れぬ要害なり。一官案に相違し亂世といひ、斯かる厳しき城門事々しく、夜中に敲き聞きもなれぬ舅が、日本より來りしなんどいふとも誠と思ひ取り



近松門左衛門

次ぐ者もあるまじ。たとひ娘が聞きたりとも二歳で別かれ、日本へ渡りし父と如何なる證據をかたるとも、容易く城内へ入れんこと難かるべし、如何は、せんとぞ叫

きける。和藤内聞きもあへず、今更驚くことならず一身の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟の前、遂に見ぬ舅よ聾よと親しみだてして、不覺を取らんより頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否



不覺を取らんよ  
り頼まれうか頼  
まれぬか一口商  
ひ、否と云はゞ  
即座の敵。

此の一章は淨瑠  
璃本の句讀に従  
つた。

と云はゞ即座の敵、二歳で別かれし娘なれば我等とも行逢姉、彼奴  
孝行の心あらば日本の風も懐かしく、文の便りもあるべきに頼ま  
れぬ心底、我れ竹林の虎狩に従へし島夷を、軍兵の元手にして切り  
靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付くは隙いらず。なんの人頼み  
此の門蹴破り不孝の姉が首捻ぢ切り、聶の甘輝と一勝負と、躍り出  
づれば母縋り付き押し止め、其の娘御の心入は知らねども、夫につれ  
て世の中の儘にならぬは女の習ひ、父とは親子御身とは胤一つ、他  
人は自ら一人にて海山千里を隔てゝも、繼母といふ名は遁れず、娘  
の心に親兄弟戀ひ慕ふまいものでもなし、其の所へ切り込んで日  
本の繼母が妬みなりと云はれんは、我が恥ばかりか日本の國の恥。  
御身不肖の身を以て韃靼の大敵を攻め破り、大明の御代に返さん  
と大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て、我が身の無念を堪忍し、人  
を懐け従へ一人の雜兵も、味方に招き入るゝこそ、軍法のもとと聞

開門々々と叩き  
しは城中響くば  
かりなり。

く。まして聶の甘輝は一城の主、一方の大將これを味方に頼むこ  
と、大方にて成るべきか、心ををさめ、案内せよと制すれば、和藤内門  
外に大音上げ、吳常軍甘輝公に直談申したき事有り、開門々々と叩  
きしは城中響くばかりなり。當番の兵士聲々に、主君甘輝公は大  
王の召によつて、昨日より出仕ありいつ御歸りも計られず。御留  
守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極、いふ事あらば  
それから申せ、御歸りの節披露して取らすべしとぞ呼ばはりける。  
一官小聲になりいや人傳に申す事ならず、甘輝公の留守ならば御  
内室の女性へ直に逢うて申すべし、日本より渡りし者と申せば合  
點のある筈と、云ひも果てぬに城中騒ぎ、我々さへ面も拜まぬ御臺  
所、對面せんとは不敵者殊に日本人とや、油斷するなと高提燈銅羅  
にやう鉢を打ち立てゝ、塀の上には數多の兵鐵砲の筒先そろへ、  
石火矢はなして打ちみしやげ、火繩よ玉よとひしめきける。奥へ



かくとや聞こえけん妻の女房樓門にかけ上がり、あゝ騒ぐなく、聞き届けて自らがそれよと聲をかくる迄、鐵砲放すな粗忽すな。なうく、門外の人々、吳常軍甘輝が妻錦祥女とは我が事、天下悉く韃靼の大王になびき、世に従ふ我が夫も大王の幕下に屬し、此の城を預り守り厳しき折も折、夫の留守に女房に逢はんとは心得ずさりながら、日本とあれば懐かし、身の上を語られよ、聞かまほしやと云ふ中にも若しや我が親か、何故尋ね給ふぞと心許なさ雲踏さに、懐かしさも先き立つて兵共粗相すな、むさと鐵砲放すなど、心遣ぞ道理なる。一官も始めて見る娘の顔もおぼろ月、涙に曇る聲を上げ、粗忽の申事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しくなり、父は逆鱗被り、日本へ身退く其の時は二歳にて、親子名残の憂き別かれ辨へなくとも、乳母が噂、物語にも聞きつらん我れこそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を経て、今の名は老一官、日

本で儲けし弟は此の男、是れなるは今の母、密かに語り頼みたき事あつて、成り果てし此の姿恥を包まず來りしぞ、門を開かせたべか



しと、染々くどく言葉の末、思ひ當たりて錦祥女扱は父か門と飛び下りて、絶りのつきたや顔見たや對心は千々に亂るれ面ど、流石一城の主甘輝が妻、下々の見る處涙を抑へて一々

覺えある事ながら、證據なくては胡亂なり。自らが父といふ、證據あらば聞かまほしと、いふより兵口々に證據々々、證據を出せ證據



證據々々、證據を出せ。ハテ親子といふより別に變はつた證據も無し。そりや別に変はつた證據も無し。

繪にとどめしは古の、顔も艶ある緑の鬢鏡は今の老いやつれ、頭の雪とかはれども變はらで殘

を出せ。ハテ親子といふより別に變はつた證據も無し。そりや曲者よと鐵砲の筒先、一度にはらりと突つかくる。和藤内かけ隔て、無用の鐵砲ぼんともいはせば撫で斬りにして呉れん。いやしやつめとも遁すなと火蓋を切つて取り圍み、證據々々と責めかけて、既に危く見えけるが、一官兩手を上げてあゝ是れ、證據はそつちにある筈、一年唐土を立ち退く時、成人の後形見にせよと、我が形を繪にうつし乳母に預けおきつるが、老の姿はかはるとも面影殘る繪に合はせ、疑ひを晴れ給へなう其の詞がはや證據と、肌に離さぬ姿繪を高欄に押し開き、柄付の鏡取り出だし月にうつろふ父の顔、鏡の面に近々と寫し取つて引きくらべ、引き合はせてよくよく見れば繪にとどめしは古の、顔も艶ある緑の鬢鏡は今の老いやつれ、頭の雪とかはれども變はらで殘る面影の、目元口元そのまゝに我が影にもさも似たり。父方譲りの額のほくろ親子の印疑ひ

る面影の、目元口元そのまゝに我が影にもさも似たり。

なし。扱は誠の父上か。なう懷しや戀しや母は冥土の苔の下、日本とやらんに父上有りとばかりにて、便りを聞かん知邊もなく、東のはてと聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を開き是れは唐土、これは日本、父は爰にましますよと繪圖では近いやうなれど、三千餘里のあなたとや此の世の對面思ひたえもしや冥途で逢ふ事もと死なぬ先から來世を待ち、歎きくらし泣き明かし二十年の夜晝は我が身さへつらかりしよう生きてゐて下さつて父を拜む難有やと聲も惜まぬ嬉し泣き。一官は咽せ返り樓門に縋りつき、見上ぐれば見下ろして、心餘りて詞なく、盡きぬ、涙ぞあはれなる。武勇にはやる和藤内母諸共に伏し沈めば、心なき兵もこぼす涙に鐵砲の、火繩もしめるばかりなり。

### 六 智惠の振賣

(「國姓爺合戦」)



井原西鶴  
江戸時代の小説家、俳人  
大阪の人  
元禄六年歿  
年五十二

井原西鶴  
大海の底に尾閭といふ穴あり。諸川の水日々夜々に入れども、かの穴のうちにて失するがゆゑに増すことさらになし。人間に一つの口あり、此の尾閭の如し。一生のうち朝夕喰物かぎりもなし。身過ぎは八百八品それ〴〵にそなはりし家職に油断することなかれ。今時は正直をもつて其の身の骨をくだけば、天理に叶ひ、それ〴〵の渡世いたさぬといふことなし。惣じて諸國の城下または入舟の湊などは、人の足手かげにて、さまざますぎはひの種もあるぞかし。

これを思ふに千軒あれば友過ぎぞかし。

されば山城の伏見の里は、七八十年も見およびしに、通り筋の脇脇は、昔繁昌の時の町並残りて、次第々々に物の淋しくなりて、何商賣するとも知れず、年月を送るもの其の數知れず。これをおもふに千軒あれば友過ぎぞかし。近年は人の心さかしうなつて、大か

たのはたらきにては、中々身過ぎに成り難し。過ぎし年の師走に竈の上塗を仕にまはるを、手廻しのよき事と思ひしに、また今年の暮には達者なる男が、釜みがきにありきける。大釜五文、其の外は大小



井原西鶴

によらず二文づつなり。また餅米あらひ賃一斗二文にて埒の明く事、手前に人をもたぬ者は勝手よし。また表具屋の隙なる細工人と見えて、定木、竹へらは、糊までを持ちて、お座敷の腰張一間を一文、あかり障子一枚二文、何行燈にても、一文にて掃除までいたしける。年徳棚を買ひければ、釣木釘まで持ちきたりて、恵方をあらため釣りに歸りぬ。何にても自由なる世時になりける。是等は世帯の事にて、



一疋三文づつに  
極め、名譽に取  
りける。

何としてか分別  
仕出だし、身過  
ぎの種とはなり  
ぬ。

中より下の人のためにもなりぬ。また五十ばかりの男、風呂敷を肩にかけて、猫の蚤を取りましよと、聲立て、まはりける。隠居がたの手白三毛をかはゆがらるゝ人、取れとて頼まれけるに、一疋三文づつに極め、名譽に取りける。まづ猫に湯をかけて洗ひ、濡身を其のまゝ、狼の皮につゝみて、しばし抱きけるうちに、蚤どもぬれたる所をうたてがり、皆おほかみの皮に移りけるを、大道へふるひ捨てける。是程の事にも、そもく、何としてか分別仕出だし、身過ぎの種とはなりぬ。

今ほど諸人かしこく、物いはずして合點する世の中に、年がまへなる男、仔細らしく小脇指に大巾着さげて皮立付を着て、何にはよらず世間に合點のゆかぬことあらば問うて見たまへ、随分人の身の上にむつかしきことの談合相手になるべしと、口廣くいひまはりぬ。心有る人は耳にも聞き入れず、大かたの人は肝つぶして、いか

いかなる虎落大  
明神のおとし子  
にもあるらんと、つらく、貌  
を眺めける。

なる虎落大明神のおとし子にもあるらんと、つらく、貌を眺めける。

過ぎにし秋の頃三軒屋川口へ砂魚釣舟に出てし人、酒に亂れて後、釣りたるはぜを丸焼にして數喰ふ事を手がらに、おのゝあはれける中にも、殊更一疋一口にせし人、俄に咽を苦しめける。是れはいかにと見るに、此の砂魚の腹に二寸ばかりの絲付いて釣針あるを咽に立て、さまゝしても抜ける事なく、此の難義すべきやうなく、船中鼓三味線も鳴りをやめて、つれづれに書き残せし法師の足鼎の如く迷惑して、命もあぶなく、宿に歸り、醫師に見せてもはかどらず、とやかく内談する折ふし、かの工夫者の通りける程に、此の事を語りければ、是れは即座に抜く事ぞと、こまかなる珠數の玉をときて、かの糸へひとつづつ通しかけて、其の後糸をしめてしづかにしやくりける程に、何の仔細もなく抜きける。いづれも此の才



覺を感じける。其の座に物言ひ堪忍せぬ男のありけるが、我等もすこし御無心有り、近年商賣左前にて、立所居所にて損銀かさなり、此の様子、大かた世間にも見及び聞き傳へて、萬事賣掛せねば、次第に手づまり、此の行先の節季、何と分別いたしても差引き算用して二十貫目餘も足らぬに極まりける。こゝの談合相手に頼みたきといへば、女房衆の親もと分限か、又は銀持の出家に弟はないかといふ。それはもちませぬといへば、此の談合は埒が明かぬと申して歸りける。

(「本朝町人鑑」)

### 七 大丈夫の覺悟

幸田露伴

大丈夫苟も身を學藝に委ねんとせば、まづ受發の二途に於いて大丈夫の覺悟あるを要す。發とは外に内の發するなり。受とは

幸田露伴  
文學者  
文學博士  
名は成行  
東京市の人  
慶應三年生

甘雨の八方に澆ぐが如し。

内の外に受くるなり。受くることは須らく大海の百川を呑むが如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんことをこれ嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず、發することの豊かならざらんことをこれ恐れて、方の東方の西を問はず、これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふところあり、發するに問ふところあるは、兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一、受をよくすれば發はその中にあり。大賢は能く受く、中才は勉めて克く受く、賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんを期する、これを眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於いて工夫刻苦するものは、學藝を成すに庶幾からん。受の途に於いて大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪へざらんと

工夫刻苦す。



評の性は多く褒貶毀譽を具す。

抑また學藝に負くこと多しといふべし。

大丈夫豈に此くの如くなるべけんや。

活潑々たり、圓陀々たり。

す、何ぞ成ることあらん。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し褒を愛して、毀を惡み貶を惡む。こゝに於いて、毀譽褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なきもの、或は徒らに懼れ、或は徒らに驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし、堂々たる六尺の身、他人の簸弄するところとなり了りたるを悟らず。人を颯風にし、我を糝糠にす。實に自ら待つ薄きのみならず、抑また學藝に負くこと多しといふべし。

大丈夫豈に此くの如くなるべけんや。それ大海の百川を吞む、大もまた吞む、小もまた吞む、清もまた辭せず、濁もまた辭せず。日に黙々たり、洋々たり、而して漸く我が大を成し、徐ろに我が大を用ゐ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の人の言を受けるまた是くの如し。精雜密疎の説、毀譽褒貶の評、皆一齊に受け

堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへども、批評もまた堯舜の聖を如何ともするなし。

擊壤の歌

日出兮而耕、日入兮而息、擊壤而飲、耕田而食、帝力奚有於我。

舜の詩

南風之薰兮、可以解我民之愠兮、南風之時兮、可以阜我民之財兮。

饒舌の分疎は牙婆の醜態、逆耳の言を聽かざるは好漢にあらじ。

我が藥籠中に收む。

て、我れをして日に進ましむるものあらんことを願はざるなし。古人洵に此くの如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへども、批評もまた堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰れか之れを以て堯の徳を傷つくるものとなさん。舜の詩なほ存すれども、誹謗の本の文は今いづくにかある。

この故に學藝に志あるものは、よく外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己れに克つて人に受くべし。饒舌の分疎は牙婆の醜態、逆耳の言を聽かざるは好漢にあらじ。たとひ満面の垢辱堪へんとして堪ふる能はず、筋張り血涌き、劍を抜いて直ちに報いんと欲するに至るとも、またまづ牙關を咬定して、隠忍し、頭を垂れ心を虚とする工夫の裏より、一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし。これを大丈夫の受の覺悟といふ。



人貶すれば便ち受けずして胡言亂説し、人讚すれば便ち默受して欣々たるが如きは、閨閣の兒女にあつては咎むべくもなし、學藝の士にあつては甚だ鄙しむべしとす。古にいはく、「峻谷に入るものは、當に葛藟を攀ぢて顛墜を免るべし、時俗に處るものは、當に道義に據りて而して後以て自立するを得ん」と。學藝に遊ぶものは當に反求の功に頼るべし、漸く深造するあらん。たゞ反求の功に頼る、則ち揚げらるとも自ら滿せず、抑へらるれば愈奮ふに足らん。徐子いはく、今それ身を立つる、人の譽むるところとならずして、人の謗るところとなるものは、未だ善をなすの理を盡くさざればなり。善をなすの理を盡くすものは、將に舜の若くならんとす。舜と同じからずと雖も、それ敢へてこれを謗るものあらんや。故に語に稱す、寒を救ふは裘を重ぬるに若くはなし、謗を止むるは身を修むるに如くはなし」と。善いかな言や、よく大丈夫の覺悟を説け

徐子  
後漢の末、魏の  
初の人  
徐幹、字は偉長  
中論を著す

五十にして  
蓮伯玉年至五  
十、而知四十九  
年之非。(淮南  
子)

子思  
名は伋  
孔子の孫

りといふべし。古人五十にして四十九を非とす。今我れ昨の我れを是として後の我れに望むなくんば、我れの死するや久しからざらん。

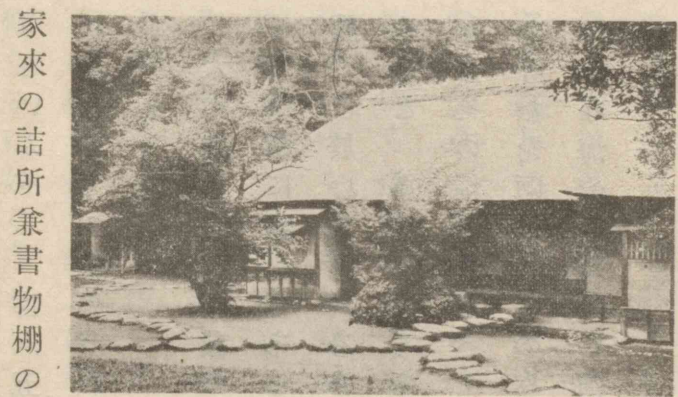
大丈夫當さに受發の二途に於いて大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡くすあるべし。子思曰はく、よくその心に勝つ、人に勝つに於いて何かあらん。よくその心に勝たず、人に勝つを如何せん」と。爲すところありて美とせられず、内に求めずして人に責むる、その情は憫むべし、その爲は悲しむべし。我れ豈に人の勝つを好むを陋とするのみならんや、我れまた實にこれを愧づ。傲はんかな海や、百川それ海を如何せん。

八 旅 よ り



太田  
常陸國久慈郡太田町  
水戸市の北方約二十軒  
義公老後の隠栖西山莊。

西山莊から



西山莊

今日水戸在の菅谷なる舊友を訪うた序に、同じ人に案内されて、太田の西山莊をおとづれました。西山莊は義公老後の隠栖で、土地の人から「西山御殿」と呼ばれる所、大隈侯の謂はゆる、最も偉大なる貴族にして同時に最も偉大なる平民なる黄門光圀卿が、半學者、半政治家、半仙人、半百姓の餘生を送られた所です。最左端なる軒先に一株の老梅をあしらつた丸窓の室は、例の床も、違棚も、簀の子もない三疊で、義公の特に好まれた書齋です。その右なる室は護衛の家來の詰所兼書物棚のある所です。最右端の奥の室は、義公が、土

榎寺  
筑前國筑紫郡  
武藏温泉  
筑紫郡二日市村  
菅公配所のさびしい榎寺。

榎寺より

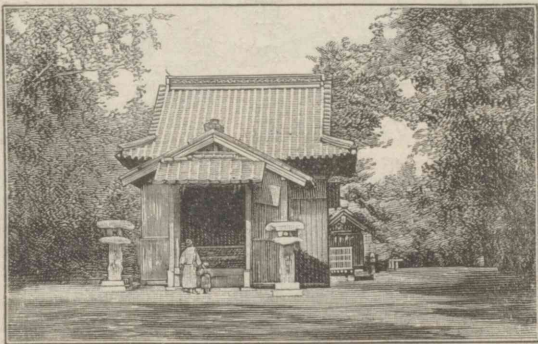
地の百姓等と膝を交へて遠慮のない話がしたいといふ趣意から、敷居をぬきにして二間を續けられた大室で、其の右手には百姓が厚意のみやげの大根胡瓜などを載せられた、野菜陳列臺ともいふべき狭い長い一種の床板が設けられてあります。私は義公の理想を小形に取り揃へた此の莊の内外を一通り見て、茶菓の接待を受けてから、裏の松山に登りました。そして此の莊から、風情のある心字の池を隔て、近く峙つた見附の松山が、大切な松をしきりに伐採されつゝあるのを見て、背景を剥ぎ取られた孤立の西山莊の淋しい姿を豫想しつゝ、淋しく歸途につきました。

太宰府の天満宮を拜し、都府樓跡を見て、それから武藏温泉へ行く途中、この菅公配所のさびしい榎寺を音づれました。後ろに天



天拜山  
武藏温泉の西北  
左手に都府樓を  
望み、右手に觀  
音寺を望む。

疎林の梢に残る  
夕陽、田の面を  
わたる夕風、悉  
く斷腸の種なら  
ぬはありませ  
ん。  
青島  
日向宮崎郡加江  
田崎の北四軒  
鵜萱葺不合尊生  
誕の神話に名高



榎 寺

蒲葵の青島より

鵜萱葺不合尊生誕の神話に名高い日向の鵜戸神宮に詣てた序

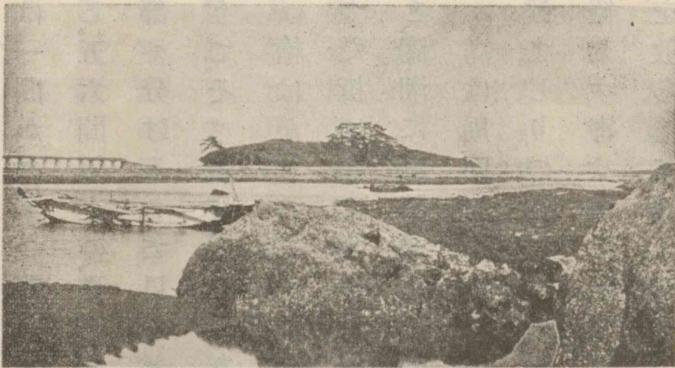
拜山を負ひ、前は青田を通ほして、左手に都府樓を望み、少し右手に  
觀音寺を望むといふ所で、まはりは悉く青い田畑にかこまれた、ほ  
んとに淋しい一廓であります。

都府樓纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲。  
その瓦の色を此處から見、その鐘の聲  
をこゝから聞かれたのかと思ふと、延喜  
の昔をまのあたりに見聞く心地して、疎  
林の梢に残る夕陽、田の面をわたる夕風、  
悉く斷腸の種ならぬはありません。

いらかをばたゞ見るばかり、鐘の聲  
たゞ聞くばかり、あはれ榎寺。

日向の鵜戸神  
社。

鵜戸神宮  
日向南珂郡鵜  
土村に在り  
官幣大社  
熱帯植物の叢生  
によつて名高い  
青島。



青 島 全 景

に、場所不相應な熱帯植物の叢生によつて、同じく名高い青島に立  
ち寄りました。青島は遠く見ると、笠を  
伏せたやうな島、出雲の宍道湖の「嫁が島」  
を見るやうな、低い、平たい、小さい島、眉の  
やうな濃緑の弧線の輪廓をくっきりと  
見せた上に、背の高い松が、髻華の如く、簪  
の如く、眞中に空を透かした、箱庭式のや  
さしい島であります。近づいて見ると、  
實に珍しい、そして恐ろしいやうな島  
であります。  
この島には植物の珍種が澤山にあつ  
て、青島神社の鳥居の前に、それを幾枚か  
の横板に列記して、行客の愛護を要めて居りますが、島の大部分を



東宮殿下  
今上天皇

木綿の花のやうな白い波が、絶えず寄せては返して、割れて、砕けて、裂けて、散つて、美しいしぶきを散らして居ります。

蔽うて居るのは、蒲葵ピウイといふ棕栢ソウコクに似た熱帯植物で、それが遠目には一間か、高々一間半位の灌木のやうに見えますが、近づいて見ると、五六間以上の、恐ろしく高いのがザラにあつて、その密生した内部へ分け入つて見ると、熱帯式の大きな毒蛇か猛獸でも出て來さうで、ぞつとするやうな感じがします。

繪はがきの左手に見える長い橋は、此の春、東宮殿下が行啓になつた折に、新に架けた記念の橋なさうで、もとは干潮には沙路を歩き、満潮には膝頭程度の波をわけて渡つた所なさうです。

島は周回二十數丁もありませうか。周囲の波打際は、大部分貝殻まじりの化石のやうな岩で、そこへ木綿ウズの花のやうな白い波が、絶えず寄せては返して、割れて、砕けて、裂けて、散つて、美しいしぶきを散らして居ります。

七月の末の眞晝日を浴びつゝ、この熱帯まがひの美しい小島に

浮世離れした半日を過ぐした吾々の悦びを想像して下さい。やがて諸葛孔明の持ちさうな蒲葵の團扇を御みやげに持つて御目にかゝります。

さやうなら。御自愛を。

雪の信州より

拜啓。年末雑沓の都を離れて、一昨日當地にまゐり候。厳しき寒さは身にこたへ乍ら、冬景色の珍しさには片はし心を惹かれ居り候が、殊にうれしきは雪の遠山の眺めに候。曉にのッそりと薄黒き姿を横たへたるが、眞晝日を浴びる頃は、綿羊が豊かなる綿毛ワタを垂れて群れ行くが如く、夕日に映えては瑪瑙の色を現じ、やがて白大理石の限りなき神々しきを見せ、つゞいて青ざめたる死の白さを見せて、遂に闇のうちにさびしき影を没す。變幻の面白さ、まことに言語に絶し候也。

(水莖)



### 九 菅公の左遷

(大鏡)

時平  
藤原氏  
延喜九年歿  
年三十九

菅原のおとゞ  
名は道眞  
延喜三年歿  
年五十九

右大臣は才世に  
すぐれめでたく  
おはしまし、御  
心おきても殊の  
外にかしこくお  
はします。

さるべきにやお  
はしましけん。

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。その折みかど御年いと若くおはします。左右の大臣に世の政行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかり、右大臣御年五十七八ばかりにやおはしけん、ともに世の政をせしめ給ひしほどに、右大臣は才世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても、殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御年も若く、才もことの外劣り給へるによりて、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲めによからぬ事出て來て、昌泰四年正月二十五

日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは皆ほどくにつけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち、慕ひ泣きておはし



菅原道眞(秋月筆)

ければ、小さきはあへなんと、おほやけも許さしめ給ひしかば、ともにゐて下り給ひしぞかし。

帝の御掟極めてあ

やくにおはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣さざりけり。かたくいと悲しく思召して、御前の梅の花を御覽じて、東風吹かばにほひおこせよ梅の花

帝の御掟極めて  
あやくにおは  
します。



亭子の帝  
宇多天皇

山崎  
山城國乙訓郡

また、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれはみくづになりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なき事によりてかく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。そのほど極めて悲しき事多かり。日頃へて都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくも

隠るゝまでもかへりみしはや

また、播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改

一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝ

ゆふべ、遠方かたのところへ、煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ烟

なげきよりこそもえまさりけれ

また、雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

かげ見るときぞなほ頼まるゝ

さりともと、世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までも

きよきこゝろは月ぞ照らさん

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給はめとこそはあんめれ。



樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられける。

筑紫におはします所の御門も、かためておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、またいと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして、

北 作らせ給へる詩ぞかし。

野 都府樓纔看瓦色

天 觀音寺只聽鐘聲

滿 此は文集の白居易の、遺愛寺鐘欵枕

宮 聽香爐峰雪撥簾看」といふ詩にもまさ

ざまに作らしめたまへりとこそ、昔の

博士どもは申しけれ。またかの筑紫

にて、九月十日、菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らしめ給



文集

白氏長慶集

白居易

號は樂天

唐の詩人

大中元年歿

年七十五

へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて、御衣賜はり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽するに、いと其の折思召しいでて作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼、秋思、詩篇、獨斷、腸、

恩賜、御衣、今在、此、捧持、毎日、拜餘、香、

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。この事どもたゞちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作りあつめさせたまへりけるを、書きて、一卷とせしめたまひて、後集と名づけられたり。また、をりをりの歌を書きおかせたまへりける、おのづから世に散りきこえしなり。

また、雨の降る日うちながめ給ひて、

あめの下かわけるほどのなればや

着てしぬれぎぬひるよしもなき

後集  
菅家後集



北野宮  
官幣中社北野神  
社  
京都市上京區に  
在り。  
あらひと神

やがて、かしこにてうせ給へり。  
夜の中に、この北野にそこの松をおほさしめ給ひて、渡り住み  
たまふをこそは、只今の北野宮と申して、現人神あらひとがみにおはしますめれ。  
おほやけも行幸せしめ給ひ、いとかしこくあがめ奉りたまふめり。  
筑紫のおはしましどころは、安樂寺といひて、おほやけより別當所べつたうじよ  
司しなどなさせ給ひて、いとやんごとなし。

### 一〇 『枕の草子』から

春はあけぼの やうく白くなりゆく。 山際すこしあかり  
て、紫だちたる雲の細くたなびきたる。 夏は夜。 月の頃はさ  
らなり、やみもなほ螢飛びちがひたる。 雨などの降るさへを

かし。 秋は夕暮。 夕日花やかにさして山の端いと近くなり  
たるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛び行く  
さへあはれなり。 まいて雁かりなどのつらねたるが、いと小さく  
見ゆる、いとをかし。 日入りはて、風のおと蟲の音ねなどいと  
あはれなり。 冬はつとめて。 雪の降りたるはいふべきにも  
あらず。 霜などのいと白き、又さらでもいと寒きに、火など急  
ぎおこして、炭もてわたるもいとつきんし。 晝ひるになりて、ぬ  
るくゆるびもて行けば、炭櫃すすび火桶の火も白く灰がちになりぬ  
るはわろし。

評釋 清少納言が着眼筆致の、人と變はつて、奇警で、簡勁で、輕妙  
で、又要點を浮かし出だして、讀む者の心にありくと印象せしめ  
る趣は、此の卷頭の一節を見ても明らかである。 今の言葉にくだ  
いて、譯しながら評して見ると、まづ初めは、



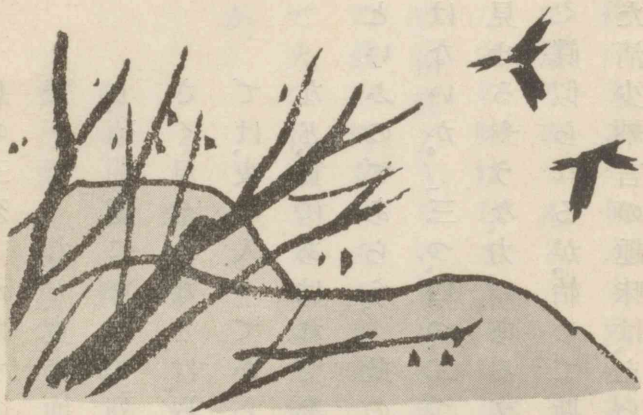
人の思ひもつかぬ所に、格を破つて新しい觀察を試みた。

廣い所から段々特殊的に／＼と眼の着け所を限つて行つて、さあ此處だ！といふ所の印象を讀者の心に鮮かに残した手際、何といふ巧さであらう。

春での見どころは曙、その曙の段々に白んで行くといふ所だ。空は一體に夜の帷におほはれて薄暗い中に、東の山際の處だけが、少しぼろ／＼と明るくなつて、そこへ紫がかつた雲の細く棚引いたところ、それが一番の見どころだ。

といふ味はひであらう。春での見所と云へば、普通の人は、櫻の花盛りとか、霞棚引く野山とかいふ所であらうが、清少納言が、人の思ひもつかぬ所に、格を破つて新しい觀察を試みたのも面白く、而も其の書き方が、春の現象の様々ある中から曙を選び、曙の中から段々白んで行く所を選び、白んで行く有様の中から、山際的一部分だけが、ぼろ／＼と明るくなつて紫の雲の細く棚引いた所を選び、廣い所から段々特殊的に／＼と眼の着け所を限つて行つて、さあ此處だ！といふ所の印象を讀者の心に鮮かに残した手際、何といふ巧みさであらう。吾々は此の文章を見て、曙の山際の紫の雲の間

夕日が空氣の澄んだ秋の空に花



夕日が空氣の澄んだ秋の空に、花やかに射して、山際に近づ

の明るみから、春の女神がぱちりした目をあいて、下界を覗き込んで、お早う、春が参りましたよ。と云ふのを見るやうな心地がする。

清少納言は、夏についても、杜鵑の、納涼のといふ月並の物を選ばずして、夜を選び、而して夏の夜は月もしよ、闇も螢の飛び違ふなどが面白く、雨の降るの迄が面白いと云つて居る。秋については、月や紅葉を賞づる普通の見方を破つて、人の氣のつかぬ夕暮を選び、夕暮の中から、更に特殊の見どころ聞きどころを選んだ。其の味はひは、



やかに射して山  
際に近づいた時  
に、その金色の  
眩ゆき夕映を横  
断して、堦へ行  
く眞黒な鳥の、  
三羽一かたまり、  
四羽一團り、  
二羽一かたまり  
と、前後して飛  
び行くなど實に  
面白い。

いた時に、その金色の眩ゆき夕映を横断して、堦へ行く眞黒な鳥の、三羽一かたまり、四羽一團り、二羽一かたまりと、前後して飛び行くなど、實に面白い。況して雁などの、竿になり、鉤になり、葡萄蔓になつて、列をなして行くのが、遙かの空に非常に小さく見えるなどは、取りわけ非常に面白い。また耳に聞く方では、夜に入つてから落葉をさそふ風の音、争つて鳴く蟲の音など、實にあはれである。

といふのであらう。此の手際のうまさ、實に言語に絶してゐるではないか。「三つ、四つ、二つ」などいふ、格を破つた、實景をまぎ／＼と見せるやうな、力のある文句も、一度御手本が出れば、誰れにも容易く眞似られるが、始めて斯ういふ觀察をなし、かういふ寫し方をした清少納言の趣味は、えらいと云はねばならぬ。彼女は斯ういふ新らしい趣味のある觀察をなし、要點を浮かし出だして、讀者の心

に明確に印象せしめる寫し方を、始めて試みたばかりでなく、其の後の文人の何人も殆んど及ばなかつた程に、立派に之れを完成して居るのである。

冬の味はひどころに「早朝」を選んだのも面白い。而して、冬らしい「相應く／＼しい」といふ事に標準をおいて、雪の降つたのが第一、霜の眞白においたのが第二、霜が降らぬまでも、非常に寒い時に急いで火の世話をするのも面白いと云つて居るのも、面白いではないか。

香爐峯

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり侍ふに、少納言よ、香爐峯の雪はいかならん」と仰せられければ、御格子上げさせて、御簾高く捲き上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などに



非常に磨きがかつてゐて、一字の無駄も一句の弛緩もない。

中宮  
一條天皇の皇后  
定子

樂天  
白居易  
唐の詩人

さへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほ、此の宮の人にはさるべきな<sup>レ</sup>めれ。といふ。  
評釋 此の一段は一寸した撮記ではあるが、非常に磨きがかつてゐて、一字の無駄も、一句の弛緩もない名文である。少し補つて隠れた味はひを現はすと、斯ういふ事であらう。  
或る日の事、雪が降つて、大層高く積もつたのを、例になく御格子を締め切つて、火鉢に火をか<sup>レ</sup>くおこして、物語などして、皆で中宮の御側におつきして居ると、中宮が外床<sup>とこ</sup>しげに、突然、少納言や、香爐峯の雪景色はどうだらうね。と仰しやつたので、すぐに御格子を人に上げさせて、私が自ら御簾を高く捲き上げると、嫣然<sup>ちやん</sup>と御笑ひになつた。よく解つたな。御前の心は私の心だ。私はお前の御蔭で、清涼殿の庭の雪と、白樂天が山居の香爐峯の雪とを、同時に併せ見る事が出来たぞよ。といふ御心であらう。仲間の人々もこん

な事は皆承知して、歌などにまで詠み込んで居るのであるが、差當つては、ふと浮かばなかつたものと見える。それでもやつぱり負け惜しみで、此の宮づきの女房だもの、その位の事は當然<sup>あたらしい</sup>てせうよ。などといひましたよ。  
まことに清女が簡潔なる名文の見本ともいふべきもので、同時に中宮清女異體同心史中の最も面白い一節である。

猿のやうに搔いつきて

正月十日、空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたるに、えせ者の家の後、荒畠<sup>あらかたけ</sup>などいふもの、土もうるはしう青からぬに、桃の木若<sup>わか</sup>立ちて、いと楮<sup>しと</sup>がちにさし出でたる、片つ方は青く、今片つ方は濃く艶やかにて蘇芳<sup>すほう</sup>のやうに見えたるに、細やかなる童<sup>わらわ</sup>の狩衣<sup>かりぎぬ</sup>はかけ破り<sup>やぶ</sup>などして、髪はうるはしきが登りたれば、又紅梅の衣、白きなど引きはこ



えたる男子半靴穿きたる、木の下に立ちて、われに好き木切り  
 ていで、など乞ふに、また髪をかしげなる童女の、袖ども綻びが  
 ちにて、袴は萎えたれど、色など好き打着たる、三四人、卵槌の木  
 の好からん、切りておろせ。御前にも召すぞ、などいふに、下した  
 れば、走りかひ取り分き、我れに多くなどいふこそをかしけれ。  
 黒き袴着たる男、走り來て乞ふに、待てなどいへば、木の下によ  
 りて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうに搔いつきて居る  
 もをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞあるかし。

譯 正月の十日、空は大分暗く、雲も厚く重たげに蔽つて居るが、  
 それでも春は春だけに、厚い雲の切目から温かい日光が鮮かに射  
 して居る。此の光を浴びて、郊外にむさくるしい百姓家が立つて  
 居る。其の家の後ろに、荒らしたまゝの畑が、美しい青黒い艶がな  
 くなつて居る、その端の方に、一本の桃の木が、生氣よく育つて、若葉

の細い楮がずん／＼と競ひ出て居る。其の日陰の一方は青黒く、  
 日向の一方は艶々した濃い蘇芳色をなして居るが、此の桃の木に、  
 細だちな、きかぬ顔の童子の、狩衣をば木に引つかゝつて破るゝに  
 任せながら、髪はきれいに結つて居るのが、登つて居ると、其の下に、  
 紅い衣に白い衣を襲ねて、後ろの腰をふつくらと膨らましたやさ  
 しい男の子がやつて來て、僕に好い木を切つて頂戴よ、ねえと云つ  
 て頼むと、今度は髪をきれいに結つた女の子の、着物は、大分綻びて  
 居るが、袴はくたく／＼ながら色の好いのを着たのが、三四人、これも  
 木の下に立ち寄つて、こちらの御前様にも御用がある。卵槌にす  
 る木の好いのを切つて下ろせ、などいふと、童子は面白がつてすぐ  
 に切つて下ろす。下では走せ違つて我れ勝ちに取り分けたが、少  
 なく取つたのが悔しがつて、私にもつと頂戴よ、など云つて居るの  
 も面白かつた。そこへ今度は黒い袴を着た八釜しい男の子が走



木の上には破狩衣の腕白小僧、下には第一に紅白の衣に半靴の小ハイカラ、つづいて衣は萎えても口は減らぬ芝居掛の御前様娘。

つて来て、「おい、おれにも頼むぞ」といふと、木の上では「待つてゐろ」といふ。「何を!？」と云ふより早く、下に驅け寄つて引き揺がす。すると木の上の腕白が、怖がつて、猿の様に嚙りついたのも面白かつた。梅の實の熟した時なども、こんな事はよくあるものである。  
評 實にうまく書いてあるではないか。春先の空模様から畑の様子、木の立按排、それから木の上には破狩衣の腕白小僧、下には第一に紅白の衣に半靴の小ハイカラ、つづいて衣は萎えても口は減らぬ芝居掛りの御前様娘、最後に黒装束の亂暴な大僧と、實際に見たそのまゝであらうが、うまくも巧みに書いてゐる。殊に、斯ういふ光景に興味を見出だして、是れだけ切り離して、印象式、スケッチ模様の氣の利いた小幅を出來した所は、何といふ新しさ、珍しさ、面白さであらう。かういふ描寫にかけては、明治以前では、他の作家はもとより、紫式部と雖も敵ふ事ではない。

斯ういふ寫生式の小篇は、今迄の註釋家、評論家から殆んど顧みられなかつたものであるが、寫生文、印象文、スケッチ物の元祖として、大いに推稱するに堪へたものである。

ありがたきもの

舅しゅうとにほめらるゝ、聳むこ。又姑しゅうとめに思はるゝ、嫁。物よく抜くる銀しろがねの毛拔けむし。主しゅそしらぬ従者じゆうじや。つゆの癖かたはなくて、容貌かた心様こころさまもすぐれて、世にある程いさゝかの疵なき人。同じところに住む人の、かたみに恥ぢかはし、いさゝかの隙ひまなく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそ難けれ。物語集など書き寫すに、本ほんに墨つけぬ事。よき草紙ならばいみじく心して書けども、必ずきたなげにこそなるめれ。男も、女も、法師も、契り深くて語らふ人の、末まで仲よき事かたし。使ひよき従者じゆうじや。搔練かひねりうたせたるに、あなめでたと見えておこす。



自分々の經驗液に浸して、とつくりと噛みしめる。

評釋 例の誰れも知つてゐて氣が附かぬ事を見出だし、氣がついても言ひ表はし得ざる事を巧みに、簡潔に而も美しく言ひ表はして讀者を惹きつけて耽味させる所が面白い。例の如く、理由は少しも添へてゐないが、趣味の精髓を擲んであるので、讀む者名々が自分々の經驗液に浸して、とつくりと噛みしめて味はへられるのである。十個條の有り難きもの、いづれもそれらの風味で、一つとしてソツが無い。舅、姑にほめらるゝ、簀や嫁の有りがたい事、是れは人情千古の恨事である。好い紙、好い筆、好い人にやる手紙、さすがの清少納言もこれには堅くなつたものと見える。是れが人情だ。印刷の行はれぬ世とて、彼女ほどの天才も、前代同時代の劣等な物語や歌集文集を、墨つけて汚すのを苦にやみつゝ、丹念に筆寫したものと見える。親交は長く續かぬもの、可なりに親しい人の名のみを記した交遊名簿が、十年も経つと、半分は其の人を

想ひ出せぬやうになるものである。使ひ好き従者、男も女も、とも有る筈がない。使はれ好き主人も同様であらう。搔練の事。染屋に模様の染附などをさせるのに、隅から隅まで難なく模様をおいて來るのは、めつたにないものである。好く、むらなく、光澤を出すのは、やはり難い事であつたのであらう。而してそれが神經質な我儘者の清少納言の神經にえらく感ぜられたのであらう。

### 一 紫式部と源氏物語

二千年間の國文學史上に現はれた最大傑作を算へる十本の指乃至五本の指の中に『源氏物語』を入れるのは、誰れしも異論の無いことであらうが、若し第一指をいづれの作に屈するかと問はるれば、吾等はまづ『源氏物語』を舉げて答へようと思ふ。西行の歌全體、

源氏物語は國文學に於ける傑作中の傑作。



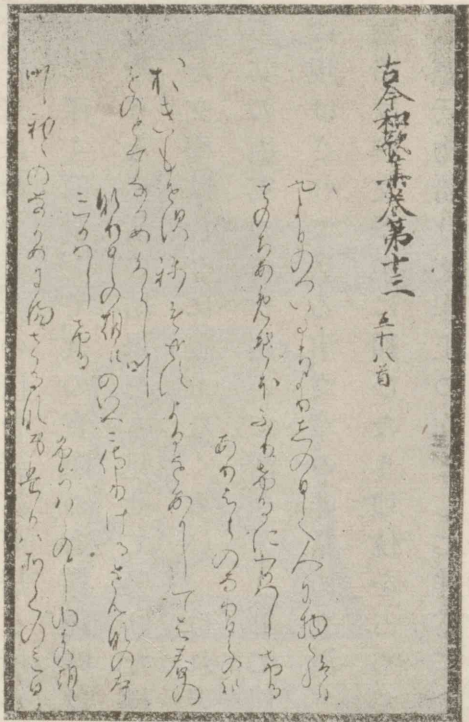
西鶴の浮世草子全體、近松の淨瑠璃全體、馬琴の小説全體といふやうに、一群一團の作物の比較になると、見方もおのづから違つて來るが、一篇の作物を孤立させての一騎打となれば、日本の過去の文學の中に『源氏』と光を争ふものは、まづ殆んどあるまいと思はれる。たしか明治四十年の春であつたと思ふ。アメリカの紐育に世界の偉人を大仕掛に記念する計畫があつて、人口や、土地の面積や、歴史の経過や、文化の程度や、いろ／＼の點から割出して、日本からは七名の偉人を選定してよこすやうにといふ依頼があつた。依頼された人は我が朝野の名士二百餘名の投票によつて之れを定めたが、投票の結果『源氏物語』の作者としての紫式部が、空海、頼朝、秀吉、家康などいふ人達と肩を比べて選舉されることになつた。初度の投票には紫式部と近松門左衛門とが同點であつたが、再選の結果、紫式部が當選の榮を擔ひ、かくして彼女は我が國の過去の藝

America  
New York

公卿、殿上人が此の上なき生活と心得た風流生活の實際の有様と、その淺ましいみじめな結果と、かやうな生活の人を惹きつける艶なる味はひと、涙ににじんだ痛ましい味はひとをば、比類なき文章に美しく描き出したといはれる。

術界を代表し、婦人を代表し、又日本を代表して世界の舞臺に立つやうになつたのである。

『源氏物語』は光源氏と呼ばれた容貌、才學、地位の三拍子が申分な



古今和歌集卷第十三 五十八首

傳 紫 式 部 筆 蹟

く揃つた貴公子の愛情生活を書いたもので、作者はこれに於いて平安朝の實際と理想とを鮮かに併せ寫したといはれる。公卿殿上人が此の上なき生活と心得た風流生活の實際の有様と、その淺ましいみじめな結果と、かやうな生活の人を惹きつける艶なる味はひと、涙ににじん



愛情を主題とした文學は古今に限りなく多い。けれども其の同情の廣く深き事、其の描寫の行き届いて居る事、人物の性格の立派に現はされて居る事、文章の非常に立派である事等に於いて、源氏物語は國文學中に類ひなき地位を占めて居る。

だ痛ましい味はひとをば、比類なき文章に美しく描き出したといはれる。此の作に現はれた中心の興味は男女の情にあるけれども、作者は少しも、其の情を弄んで居る所がなく、多くの人物と時代とに深く同情して、其の實際の有様、趣味はひを傳へると共に、一面かやうな生活の結果をも見せて呉れた趣がある。愛情を主題とした文學は古今に限りなく多い。けれども其の同情の廣く深き事、其の描寫の行き届いて活き／＼して居る事、人物の性格の立派に現はされて居る事、文章の非常に立派である事等に於いて、源氏物語は國文學中に類ひなき地位を占めて居る。

『源氏物語』は文學上の作として非常にえらいばかりでなく、其中には作者の文學に對する非常にえらい見識が現はれて居る。此の物語の示す所によると、紫式部は作家として第一流であつたばかりでなく、評論家としても、また明治以前の第一人者であつた。



(筆琳光形尾) 部式紫



尾形光琳

尾形光琳は徳川時代の産んだ最も偉大なる裝飾畫家である。京都の人で、その師としてはいろ／＼の人が挙げられるが、本阿彌光悦、野々村宗達の畫風を享け、殊に宗達の筆意を大成したかの觀がある。意匠の奇抜と圖様の大膽とに加ふるに、寫生の精緻を以てし、豊富なる色彩の中に瀟洒の趣致を現はす處に特色があると云はれる。

『源氏』の螢の卷の中に、かういふ一節がある。

(物語は)神代より世にある事を記しおきけるななり、日本紀などは唯だ片そばぞかし、是等にこそ道々しく精しき事はあらめとて笑ひ給ふ、その人の上とて有りのまゝに言ひ出づることこそなけれ、善きも悪しきも、世に經る人々の有様の、見るに飽かず、聞くにも餘る事を、後の世にも言ひ傳へさせまほしきふし／＼を、心にこめ難くて言ひおき始めたるなり。

物語といふはまづ今の小説の事で、こゝは源氏の君が小説といふものの本領を説明して、小説の價値が歴史に優るとも劣らないことを論じた所である。此の意味を敷衍すると、物語、小説といふものは、神代の大昔から世の中にある事、人類の出始めから人類のあらん限り長へにあるべき事、即ち人情の内面生活を書いておいたもので、東夷征伐、入鹿退治といふが如き、或る時、或る場所、或

物語は人間の内面生活を傳へる點において歴史以上の價値があるともいはれる。

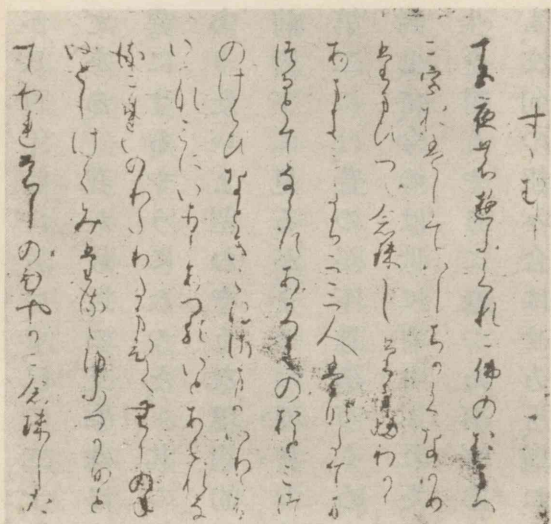


る人物に限られた事を書いたものではない。歴史は、日本紀のやうな立派なものでも、つまりは或る時或る處に限られた或る人の事業の表面的の記事に過ぎぬ。之れに比ぶれば、人間の生存する限り長へに存在する人生の味はひや、内面の情生活を寫した物語の方が遙かに奥深い立派な意味を含んでゐるではないか。物語には、これは鎌足の事、入鹿の事といつて、事實通りに表はすといふことはないが、善いにつけ、悪いにつけ、浮世に暮らし行く人々の様子、幾度見ても見足るといふことがなく、幾度聞いても聞き飽きるといふ事のない、意味の深い人情生活を、自分ひとり心の中心に籠めおくことが出来ず、後世にも言ひ傳へさせたいといふので、書き残し始めたのが、即ち物語である、といふ事である。

すばらしい卓見ではないか。吾等は和漢洋に通じて、是れほど要を得て味はひのある小説の定義を見たことがない。これは幾

度褒めても褒め過ぎることの出来ぬ偉い見識である。『源氏物語』以來明治の二十年代に至るまで、數多の作家、批評家、註釋家が出たけれども、このやうな偉い見識を持つて居た者は一人もない。

紫式部は、はかない一女子の身を以て、『日本紀』が一國の大典籍と崇められた時代に生まれながら、之れを「片そぼぞかし」と斥け去つて、小説にそれ以上の價値を認めただばかりでなく、よくその主張を實にして、『日本紀』の傍にも寄りつけぬやうな大作を大成した。彼女は日本に於ける最初の自覺した文學者であり、同時に技巧見識の兩方面に於いて



源氏物語繪詞



前古無比の高い地位を占める者である。

『源氏物語』について更に一つの驚くべき事がある。それは、『源氏』が八百年前に於いて、已に二十世紀の最近文學を豫想して居る事である。我が最近の文學殊に小説は、昔のと比べて非常に面目を異にするやうになつた。其の相違の大體は、第一には、昔のが斯うありたいと望むやうな理想的の事を書いたのに對して、今のは眼前脚下に見るがまゝの現實の人生を書くやうになつた事である。第二には、昔のが不思議づくめに面白をかしく書かうとしたのに對して、今のは世に有りふれた誰れも知つて居る平凡なる世相、人生を書くやうになつた事である。第三には、昔のが趣向の立て方も、文句の組み合わせ方も、概ねわざとらしい工夫を凝らし、技巧を弄んだのに對して、今のは事實の通り、吾々の平生話す通りを、自然のまゝに書くやうになつた事である。第四には、昔のが、前代の大

我が最近文學の特色

- 一、眼前脚下に見るがまゝの現實の人生を書くやうになつたこと。
- 二、平凡なる世相、人生を書くやうになつたこと。
- 三、事實の通り、吾々の平生話す通りを、自然のまゝに書くやうになつたこと。
- 四、自分獨得の手振を現はさうとつとめるやう

になつた事。  
五、趣味のある一部を取り出して精しく寫すやうになつた事。

玉の小櫛  
源氏物語の註釋  
評論の書

家の書いたのを御手本として、其の格式に違はぬやうにと努めたのに對して、今のは名々勝手に自分流を出だし、自分獨得の手振を現はさうとつとめるやうになつた事である。第五には、昔のが事の全局面を廣く淺く疎らに書くことを常としたのに對して、今のは趣味のある一部を取り出して精しく寫すといふ風になつた事である。是れが日露戦争を境とした新文學と舊文學との大體の相違であるが、『源氏物語』が八百年の昔に於いて、此の最近文學の傾向を、殆んどそのまゝに現はして居るのは、非常に面白いこととて、又實に驚嘆すべきことである。昔の文人で此の事に着眼したのは、本居宣長たゞ一人であるが、宣長は其の名著『玉の小櫛』に於いて此の事に言ひ及んで居る。彼れの説を今の批評家の言葉に直すと、外の物語が大ざつばな人物を好い加減に拵つて居るのに對して、『源氏』はよく人々名々の特色即ち個性を書いた、外の物語が奇抜な



事件や、趣向を寫さうと狙つて居るのに對して、『源氏』は人情を寫し、人生に普通にして誰れの胸にも深く響く平凡の事を、自然に無理なく寫した、外の物語が漢文流の粗漫な書き方をして居るのに對して、『源氏』は人の心の活動推移の趣を精細に描いた、といふのであらう。正しく最近文學の新傾向そのまゝで、之れを見ぬいた宣長の批評は實に時世を抜いた卓見であるが、かやうな作を八百年前に出した紫式部の見識は更にえらいと云はねばならぬ。

### 一二 法成寺の造營

(榮華物語)

今は御心地例ざまになり果てさせ給ひぬれば、御堂の事を思し急がせ給ふ。攝政殿、國々まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂の事を先につかうまつるべき仰事のたまふ。殿の御

堂御  
成法寺、寛仁三年藤原道長の創建、址は今の京都御所の東隣。  
攝政殿  
道長の長子賴通  
殿  
藤原道長

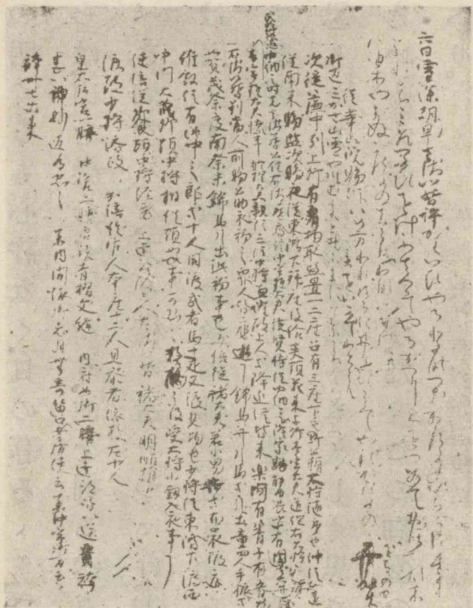
宵、曉の御行ひも怠らず、安きいも大殿ごもらず、たゞこの御堂のことのみ深く御心にしませ給へり。

前も、このたび生きてるは別事ならず、我が願の叶ふべきなめり。とのたまはせて、他事なく、たゞ御堂におはします。方四町をこめて、大垣にして、瓦葺きたり。さまぐに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るゝも口惜しうおぼされて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々様々造りつけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知らず作りなめ、そなたをば、北南と馬道をあけて、道を整へ造らせて、廊、渡殿數おほく作らせ、なんど思したまふに、鶏の鳴くも久しく思され、宵、曉の御行ひも怠らず、安きいも大殿ごもらず、たゞこの御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。

日々、に多くの宮達、大臣、上達部、さるべき人々参り罷て立ちこむ。さるべき殿ばらをはじめ奉りて、宮々の御封、御莊どもより、一日に



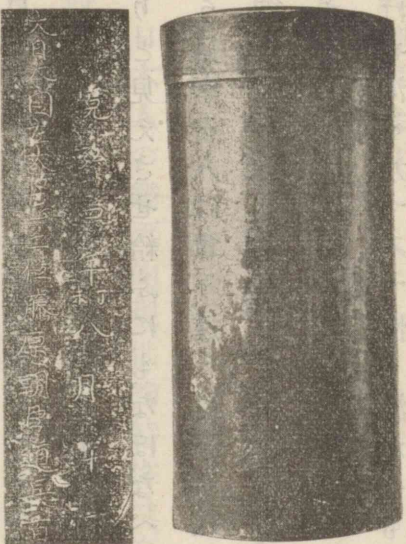
五六百人、千人の夫どもを奉るにも、人の數おほかる事をばかしこ  
き事に思したり。國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今



藤原道長筆蹟(記) 日 讀 筆 長 道 原 藤  
皮、瓦など、多く參らする事  
を、我れもくくと競ひつか  
うまつる。おほかた近き  
も遠きも參りこみて、品々  
方々あたりくにつかう  
まつる。或る所を見れば、  
御佛つかうまつるとて、佛

師共百人ばかり並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめて  
たけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼり  
ゐて、大きなる木どもには、大綱をつけて、聲を合はせてえさまさと

引き上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座作りかゝやかす。  
板敷を見れば、木賊、椋の葉などして、四五十人、手毎に並みゐて磨き  
拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども數をつくしたり。また、年老いたる



藤原道長 納經の筒  
翁などの、三尺ばかりなる石  
を、心に任せて切りと、のふ  
るもあり。池を掘るとて四  
五百人おりたち、山を疊むと  
て五六百人のぼりたち、また  
大路の方を見れば、力車にえ  
もいはぬ大木どもに、綱をつ

けて、叫びの、しりて引きもてのぼるあり。鴨川の方を見れば、筏  
といふものに、樽材木を入れて、棹さして、心地よげに謠ひの、しり  
て上るめり。大津梅津の心地するも、西は東といふことはこれな



須達長者  
佛在世時の舍衛國の富者

祇園精舎

同じ長者が釋尊の爲めに祇園園といふ廣大な庭園を作り、その中に建てたる立派な寺。

この御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。

りけりと見ゆ。盤石といふばかりの石を、はかなき筏にのせてゐて來たれど沈まず。すべて色々様々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎作りけんも、かくやありけんと思ゆるを、冬の室、夏の風、おのゝことゝなり。かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと思えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近く見奉る人は尊み、遠く見奉る人は遙かに拜み參らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂の物を持って運ばせ、河も水すみ、快く浮かべもて參ると見ゆ。なほなべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは先年に、長谷寺にある僧の、御祈りをいみじうして寝たりける夢に、大きにかめしき男の出で來て、何かかく、殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛

法興隆のために生れ給へるなり。とぞ見えさせ給ひける。また、天王寺の聖徳太子の御日記には、王城より東に、佛法弘めん人を我れと知れ。とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。

### 一三 庭園に現はれたる我が國民性 その一

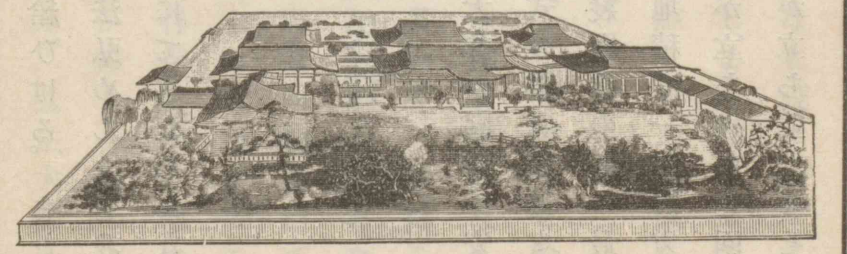
日本人の樂天的、現世的特性は、奈良朝時代の古昔の庭や、平安朝時代の所謂寢殿造の庭や、乃至其の以後の自然式の築庭に最もよく現はれて居る。試みに平安朝時代に於ける寢殿造の庭の最も模範的なものについて、簡単に説明すると、まづ地積は一町四方、その内、中央の稍、北寄りに、南に向つて母屋の寢殿が立ち、之れを圍んで、左右と背後とに、東の對、北の對、西の對、其の他が立ち並んで、それ

奈良朝の庭、平安朝の寢殿造の庭等には、樂天的、現世的なる國民性がよく現はれてゐる。寢殿造の庭の概観。



龍頭鶴首の船に

が渡廊で連絡される。之れに對して、地所の南半分が所謂林泉で、其のほと中央部に泉水を設け、その中に島を築き、左右には池に臨ませて瀧殿と釣殿とを建てる。そして是等が總べて板橋其の他で陸地に連絡される事となるのである。池の背後は一帶の築山で、此處に常緑の松を初めとして、櫻、椿、躑躅、檜等の花物から楓、檀、檜、榎、兒手、柏、榊、篠竹、萩などを一面に植ゑまぜて背景を作る。池中の中島や、其の他庭全體の要所要所にも、同様の上木、下木、乃至花物が點綴される。全體は寢殿から見て楽しむ庭であるが、同時に、又降り立つて遊んで楽しむ庭でもあつて、これが龍頭鶴首の船に乗つて、詩歌管絃の遊樂



造 殿 寢

乗つて、詩歌管絃の遊樂に日を送る。

王朝時代の庭は自然式で、植物本位。

に日を送つた平安朝の大宮人、特に當時權勢に誇り、榮華をほしいまゝにした藤原氏一族の日常生活の舞台であつたのである。彼等は自然の環境と感情本位の文化とに育てられて、此の庭を發明し、存分にそれを享樂した。そしてそれは實に現實に自然を樂しみ、草木を愛する我が國民性を、具體的に築庭の上に表現した手初めのものであつた。  
勿論、當時の庭は、今日全く現存して居ないので、吾々は只だ之れを歴史の上で研究し、想像し得るに過ぎないが、然しながらそれが如何に自然式であり、又如何に植物本位の庭であつたかは、容易に想像することが出来る。此の特性は更に遡つて奈良朝の文献にも現はれて居る。例へば、萬葉集に現はれた植物を見ると、最も多いのは萩、梅、橘、櫻、卯花、撫子、山吹等であるが、當時の漢詩集なる懷風藻に現はれた植物を調べて見ても、やはり松、柳、梅、桂、桃、櫻といふや



花の下にて  
願はくは花の下  
にて春死なんそ  
の如月の望月の  
頃 西行

うな、所謂日本趣味の植物が數多く詠ぜられて居る。かういふ事は、同時代の西洋諸國には斷じて無かつた事で、西洋人はつい近代迄は、自然に對して日本人の様な強い愛着をも趣味をも感じて居なかつた。況んや之れを邸内に移して、春に、秋に、月に、雪に、其の風情を楽しむと云ふやうな事は、全く無かつた事である。然るに、我が國には大昔から、かくの如き自然愛の精神が強烈に現はれ、しかもそれが現實享樂の生活と結びついて、花の下にて春死なむ「死なば骸に花よ散れ」といふやうな美しい潔さを男子の本領とするやうになつてゐる。而して此の自然的、現實的の趣味は、庭の感じにも、何處となく現はれ出でて、それがあくまでも、我が國の庭を非思索的、非宗教的ならしめて居る。

我が國古來の築庭の中、現存して居るもので最も舊いのは、京都の神泉苑で、一千年前のものであるが、今は全く荒廢して、地割の一部を、ほんの申譯に止めて居るのみである。また日本で古い庭の最も多く残つて居るのは京都であるが、原形をそのまま、存して居るのは、約五百年前の室町時代以後の庭園である。

室町時代の庭園は、同時代の他の藝術と等しく、著しく二つの働原エトレンの洗禮を受けてゐる。その一つは佛教思想、特に禪宗で、他の一つは支那思想である。

室町時代の庭園に現はれた著しい變化は、まづおり立つて遊ぶ庭が坐つて見る庭となつたことであるが、更に見のがしてはならぬ特色は、同時代の他の藝術と等しく、著しく二つの働原エトレンの洗禮を受けてゐることである。その一つは佛教思想、特に禪宗であり、他の一つは支那思想である。この二つの思想が日本の庭園に影響した趣は、岩組の一つぐに、甚だしく佛教的乃至支那的の臭味を帯びた名稱の冠せられてゐるのを見ても解る。例へば、守護石、二神石、禮拜石、庭洞石、不動石、童子石、虎溪石等の名稱は明らかに此の事實を語つて居るものである。その他、陰陽、方位、吉凶、因縁等によつて、庭の一木一草の位置を決定する事も、亦支那思想の影響で、こ



清淨な白砂の幾何學的輪廓の盛立。

れが自ら個々物の配置と全體の構成とに一定の型を與へ、従つて我が庭園が甚だしく類型的となり、遂に徳川時代に至つて、築山及び平庭の各に、それ／＼眞行草三體の型が現出するやうになつた。此の類型的、非個性的と云ふ事は、中世以後近代に至る我が國の築庭上の主なる特徴の一つとなつてゐるものであるが、然しながら折々は獨創的なる築庭家があつて、彼等の天才によつて築かれた除外例とも見るべき個性的、非類型的な二三の庭園が、立派に現存して、今日親しく見ることが出来るのは幸な事である。所謂はゆる除外例なる庭園の現存して居る第一は、京都銀閣寺の庭である。吾々は其所の所謂銀砂灘と向月臺とに於いて、まづ我が國民の持つ淡泊清淨の特殊の感じを味はへることが出来る。方丈の前、東山を背景にして、瀟洒たる松と岩と水と、而して例の銀閣とを前景として布置された、清淨な白砂の幾何學的輪廓の盛立、

淡泊清淨なる銀閣寺。



それが實に巧みに模様化されて、淡泊清淨の味はひを發揮して居る。しかもそれは驚くべき獨創である。從來銀閣寺の庭は多くの庭の臨本となつたので、飛石の配置や樹木の植ゑ、工合などの隨分巧みに摸倣されたものもあるが、然し此の盛砂の手法と配置とは、此の庭獨特の妙趣で、容易に他の追隨を許さぬものである。此の庭に現はれた、この清淨淡泊の味はひこそは、實に外來思想の影響を受けざる日本固有の思想の現はれて、銀閣寺の庭は、此の點に於いて、特に獨創的、非類型的の庭園といはるべきであらう。



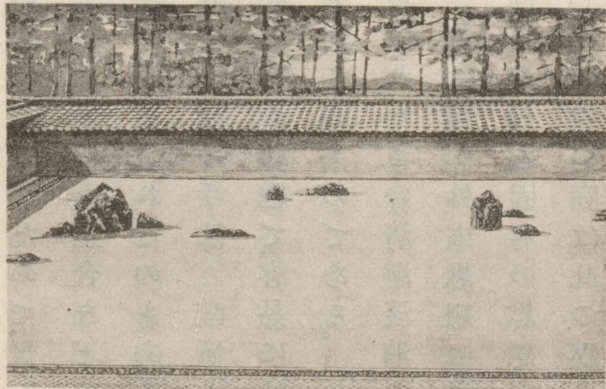
龍安寺

山城國葛野郡花園村谷口に在り。大雲山と號し、臨濟宗に屬す。細川政元、父勝元の墓地として創建す。

微妙な音樂的韻律を奏でさせて居る。

清楚閑雅雄大な龍安寺の庭。

次に吾々は龍安寺の謂はゆる「虎の子渡しの庭」を擧げねばならぬ。それは方丈の前に低い築地塀を繞らした一構の庭で、一面に白砂を敷いた間に、大小十五個の岩石を巧みに配置して、微妙な音樂的韻律を奏でさせたものである。これが此の庭の特色で、作者が古今獨歩の手腕を見せたところであるが、それが更に借景として、塀の外に廣がつた一帶の青空と曠原とを取り入れて、闊然たる趣を見せたところは、前なる銀閣寺の庭に優るとも劣らない優れた工夫で、此處に我が國民性の明るい晴れやかな一面を見ることが出来る。尙ほまた此の庭に現はれた大き



龍安寺庭園

な感じは、一つは修養を積んだ偉大な日本人の作であることを示して居る點であり、一つはあくまでも清楚閑雅で氣品が高く、宇宙と一つに融け合つて居るやうな雄大な氣分を示して居る點である。

龍安寺の石庭は大きな氣分に於いて無類の偉さを見せたものであるが、之れに反して、小さい内に全體が纏まつて居て、而も藝術的なる韻律を表現して居る庭園の代表的なものは、紫野大徳寺なる大仙院の庭である。これは椿其の他の刈込物と岩組とで、山間溪流を象徴的に寫した所謂「枯山水」の典型的な庭で、何とも云はれぬ妙趣がある。

以上の三つはいづれも個性的、非類型的の特色を有つた國寶的の庭園であるが、三つが三つながら斯道の天才相阿彌の手に成つたことは、一種の驚異といはねばならぬ。

大徳寺

京都市上京區紫野に在り。臨濟宗一派の大本山。

相阿彌

造庭家、畫家、歌香茶等に通ず、足利義政に仕ふ。



### 一四 庭園に現はれたる我が國民性 その二

茶庭は禪趣味、茶趣味の産んだもの、其の精神は形は小さいが無限の大宇宙と交感融合する所にある。

次に私は禪趣味の影響を受けた茶庭について語らねばならぬ。元來茶趣味は戰國時代の雰圍氣が必然に生んだ生活の藝術化の一種であるが、實は禪趣味が茶趣味を生み、その結果として茶室が考案され、同時に茶庭が創造されたといふ方が、更に適當であらう。

正しい茶庭は立派な藝術であつて、吾々の祖先の偉大な形見であるといつてよい。而して此の茶庭はあくまで禪趣味の影響に起因するもので、嚴格にいへば、これに現はれた全體の過程は、元來日本人の傳統的色彩ではなかつたのであるが、然し其の内に現はれた淡泊、清淨、清楚、閑雅の感じは、あくまでも日本人本來の國民性

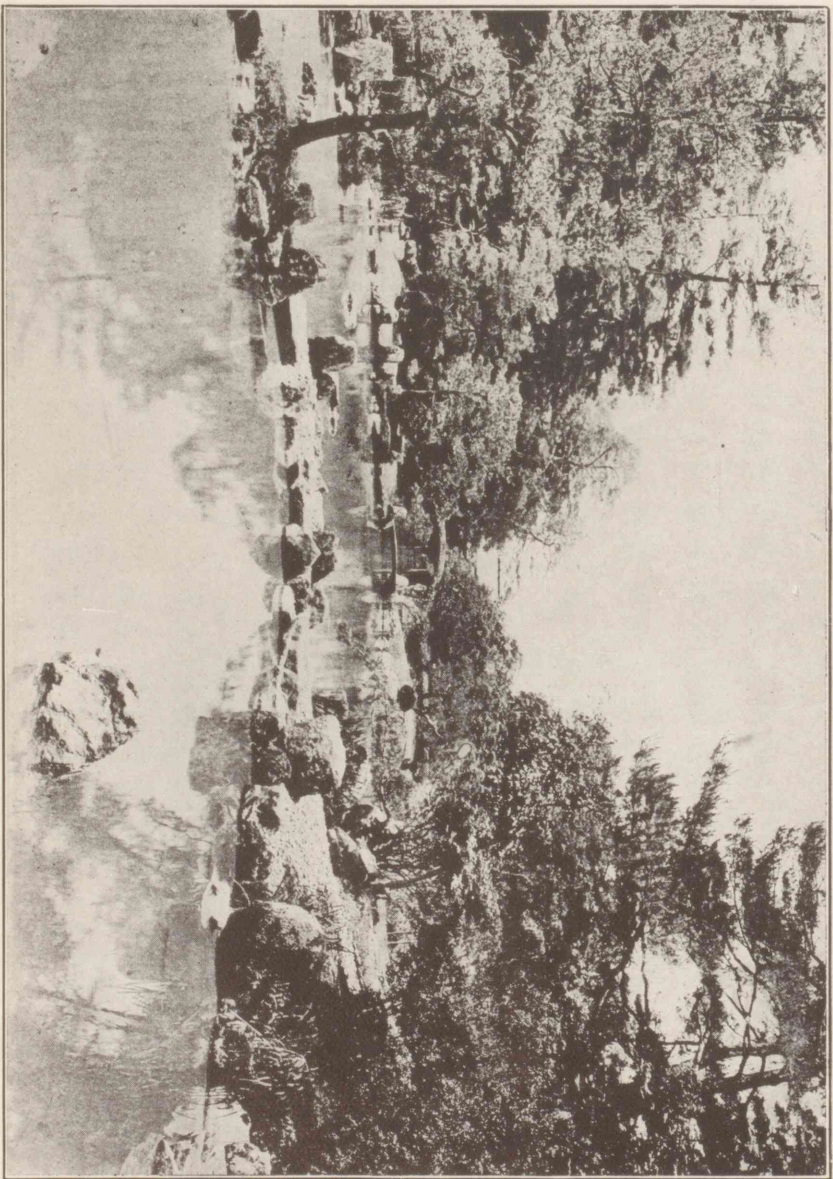
の大きな現はれである。元來茶庭は其の性質上、形は小さいが、精神は無限の大宇宙に通つて、天地の靈氣其の物と交感融合するといふ大きな味を持つてゐたのであるが、その精神が次第に忘れられて形にのみ囚はれた爲めに、後世の物はすっかり全體の感じを小さくし、同時に其處にいやみのある一種の型を生じて、所謂類型

江戸の庭は、見る庭、廻遊式の庭。

江戸時代になると、室町時代の坐つて見る庭が、更に變化して歩いて見る庭、即ち所謂廻遊式の庭となつた。まづ面積は在來のよりは遙かに廣くなつて、中央に池があり、池の中に中島がある。池の周圍には、或は築山を築き、或は植木を植ゑ、或は小屋を建て、燈籠を置く。池に臨んでは、柿茸こけりの御茶屋が立ち、岸邊の程よき處には船遊びの乗り場が設けられる。その他丘の一隅に立つ茅茸の茶室、さては櫻のトンネル、槭樹もみぢの林、松の杜、躑躅の丘、菖蒲、杜若の汀、竹



叢の小徑、岩組、一里塚、鳥居、制札、楊、雪見燈籠など、くさくさの景物を  
取り來つて雑多な風情を構成し、それが全庭に配置されて、歩くに  
従つて景色が變化する。更に池には金魚や鴨や鴛鴦などを放ち、  
丘には鶴、其の他の動物が養はれる。これが普通の形式で、いかにも  
手の込んだ風致に富んだものではあるが、然し其處にはもはや  
彼の王朝に於ける様な陽氣な自由な現世的の享樂が見られなくなつた。  
それは歩いて花鳥と共に遊ぶのではなくて、坐つて景を  
楽しむか、或は歩いて景を見るのである。かくして我が庭園はい  
つしか所有者若しくは其の家族の實生活と離れて、之れを所有す  
る家門の榮えを世間に示す一種の象徴となつた。自己の富を客  
に誇る一種の道具となり了つた。吾々は此處に我が國の庭園が  
美の生活若しくは美の享樂から退化し墮落した虚偽の美を見、同  
時に其の死藏者となつた形式主義者の日本人を見るのである。



園庭宮離桂



桂離宮

桂離宮は山城國高野郡桂村にある。天正の末、豊臣秀吉が後陽成院天皇の皇弟式部卿智仁親王の御別業として造營したものが、礎となり、その後寛永年中に、小堀遠江守政一が、革命により、材料、人夫年月、すべてに制限なく、理想的に増築修營して今日の偉觀を呈することになつた。廣き一萬三千百七坪、東に桂川の清流を控へ、西に西山一帶の翠微を望み、四境幽閑、橋梁相連つて雁行し、庭の中には大池があつて、ゆたかに桂川の水を引いて居る。明治十六年離宮となり、桂離宮と稱せられた。

江戸時代の代表名園、桂の離宮。

今後の庭は住宅と共存し融和して、自由に使用される、實用主義の庭園たるべきである。

此の時代になつて、我が庭園はこの通り墮落したが、しかしながら其の中でも良いものはやはり良い。而して此の式の庭園の中、徳川初期のもので最も見るべきは、京都の西郊にある桂離宮の庭である。此の庭は小堀遠州の作で、其處には瀟洒纖巧の日本趣味が、廣大な林泉の全域に亘つて遺憾なく發揮されて居る。而してそれは實に世界に絶した日本庭園の眞諦を、日本式に極度に發揮したものである。

要するに日本の庭園は、もと、我が國民性の發露として、或は淡泊清淨に、或は清楚閑雅に、或は瀟洒纖巧に、それらの趣味を現はして世界に誇り得るものであつたが、それが江戸時代になつて、生氣のない、小さい、類型的の表現と構成とに墮落したのは惜しむべきことであつた。而して新時代に於ける我が庭園は、吾々の住宅と共存し融合して、住宅の一部の如く自由に使用せらるゝものでな



本多靜六  
造園學者  
林學博士  
東京帝國大學名  
譽教授

ければならぬ。これが吾々の謂はゆる實用主義の庭園で、其の完  
成につとめるのが我が庭園に新しい生命を吹き込む唯一の道で  
あると思ふ。  
(本多靜六の文に據る)

### 一五 古事記三章

(古事記)

#### 一 海幸山幸

火照命  
火遠理命  
共に彦火之邇々  
藝命の御子。  
火遠理命はまた  
彦火々出見命と  
も申す。神武天  
皇の御祖父君。

故火照命は海幸彦として、鱸の廣物鱸の狭物を捕り給ひ、火遠理  
命は山幸彦として、毛の荒物毛の柔物を捕り給ひき。こゝに火遠  
理命その兄火照命に、かたみに幸を易へて用ゐてむと謂ひて、三た  
び乞はしゝかども許さざりき。然れども遂にわづかに得易へ給  
ひき。かれ火遠理命海幸をもちて魚釣らすに、かつて一魚も得給

山幸もおのが幸  
幸、海幸もおの  
が幸々、今はお  
のもゝ幸かへ  
さむ。

いかにぞ空つ日  
高の泣き患へ給  
ふゆゑは。

はず、また其の釣鉤をさへ海に失ひ給ひき。こゝにその兄火照命、  
その釣を乞ひて、山幸もおのが幸々、海幸もおのが幸々、今は各幸  
かへさむといふ時に、其の弟火遠理命のり給はく、汝の釣は魚釣り  
しに、一魚も得ず、遂に海に失ひてき。とのり給へども、その兄あな  
がちに乞ひ徴りき。かれ其の弟御佩の十拳劍を破りて、五百釣を  
作りて、償ひ給へども取らず、また千釣を作りて償ひ給へども受け  
ず、猶ほ其の正本の釣を得むとぞいひける。

こゝに其の弟海邊に泣き患へています時に、鹽椎神來て問ひけ  
らく、「いかにぞ空つ日高の泣き患へ給ふ故は」と問へば、答へ給はく、  
「我れ兄と釣を易へて、その釣を失ひてき。かくて其の釣を乞ふ故  
に、あまたの釣を償ひしかども、受けず、猶ほ其の本の釣を得むと  
云ふなり。かれ泣き患ふ」とのり給ひき。こゝに鹽椎神、我れ汝が  
命の爲めに善き謀せむと云ひて、即ち無間勝間の小船を造りて、其



の船に乗せまつりて教へけらく、我れこの船を押し流さば、やゝ暫しいでませ。うまし御路あらむ。乃ち其の道に乗りていましなば、魚鱗の如造れる宮、それ綿津見神の宮なり。其の神の御門に到りましなば、かたへの井の上に、湯津香木あらむ。かれ其の木の上にましまさば、其の海神の御女、見て計らむものぞ。と教へまつりき。かれ教のまに、少しいてましけるに、備さに其の言の如くなりしかば、即ち其の香木に登りてましましき。こゝに海神の御女、豊玉媛の從婢、玉器を持ちて水酌まむとする時に、井に光あり。仰ぎ見れば、麗はしき壯夫あり。いと異奇しと思ひき。かれ火遠理命、その婢達を見給ひて、水を得しめよと乞ひ給ふ。婢達乃ち水を酌みて、玉器に入れて奉りき。こゝに水をば飲み給はずして、御頸の珠を解かして、御口に含みて、その玉器に唾き入れ給ひき。こゝに其の珠器にいつきて、婢達珠を得離たず。かれ珠着けながら、豊

天津日高  
彦火之邇々藝命  
の御事。

大きなる歎き一  
つし給ひき。

玉媛命に奉りき。かれ豊玉媛命あやしと思ほして、出で見て、其の父に、吾が門に麗はしき人いますと申し給ひき。こゝに海神自ら出で見て、此の人は天津日高の御子、虚空津日高にませりと云ひて、即ち内に率て入れまつりて、海驢の皮の疊八重を敷き、また絹疊八重を其の上に敷きて、その上にませまつりて、百取の机代の物を具へて、御饗して、即ち其の御女豊玉媛をあはせまつりき。かれ三年といふまで、其の國に住み給ひき。こゝに火遠理命、その初めの事を思ほして、大きなる歎き一つし給ひき。かれ豊玉媛命、その御歎きを聞かして、その父に申し給はく、三年住み給へども、常は歎かすこともなかりしに、今夜大きなる歎き一つし給ひつるは、もし何の故あるにかと申し給へば、その父の大神その御鞞の君に問ひまつらく、今朝あが女の語るを聞けば、三年ましませども、常は歎かすこともなかりしに、今夜大きなる歎



此の鉤は、おぼ  
ち、すゝち、ま  
ぢち、うるぢと  
いひて、後手に  
賜へ。

きし給ひつと申せり。もし故ありや。またこゝに來ませる故は  
いかにぞ。と問ひまつりき。かれ其の大神に、備さに其の兄の、失せ  
にし鉤をはたれる状を語り給ひき。こゝをもて海神悉に鱸の廣  
物鱸の狭物を召集めて、若し此の鉤を取れる魚ありやと問ひ給ふ。  
かれもろくの魚ども申さく、この頃赤海鯽魚なも喉に鰓ありて、  
物え食はずと愁ふなれば、必ずこれ取りつらむ。と申しき。こゝに  
赤海鯽魚の喉を探りしかば、鉤あり。即ち取り出でて、清洗して、火  
遠理命に奉る時に、その綿津見大神、教へまつりけらく、この鉤を其  
の兄に賜はむ時に、のり給はむ状は、此の鉤はおぼち、すゝち、まぢち、  
うるぢといひて、後手に賜へ。しかして其の兄高田を作らば、汝が  
命は下田を作り給へ。その兄下田を作らば、汝が命は高田を作り  
給へ。然し給はゞ、吾れ水を知れ、ば、三年の間に必ず其の兄貧し  
くなりなむ。若しそれ然し給ふ事を怨みて攻めなば、鹽盈珠を出

だして溺らし、若しそれ愁へ申さば、鹽乾珠を出だして活かし、かく  
たしなめ給へ。と申して、鹽盈珠、鹽乾珠併せて二つを授けまつりて、  
即ち悉に鰐どもを召集めて、問ひ給はく、今天津日高の御子虚空津  
日高上つ國にいでまさむとす。誰れは幾日に送りまつりて、返り  
言申さむ。と問ひ給ひき。かれ各身の長さのまに、日を限り  
て申すなかに、一尋鰐僕は一日に送りまつりて還り來なむ。と申す。  
かれ其の一尋鰐に、然らば汝送りまつりてよ。若し海中を渡る時、  
な畏せまつりそ。と告りて、即ち其の鰐の頸に乗せまつりて送り出  
だしまつりき。かれ言ひしが如、一日の中に送りまつりき。  
こゝをもて備さに海神の教へし言の如くして、かの鉤を與へ給  
ひき。かれそれより後、いよ、貧しくなりて、更に荒き心を起こし  
て迫め來。攻めむとする時は、鹽盈珠を出だして溺らし、もしそれ  
愁へ申せば鹽乾珠を出だして救ひ、かくたしなめ給ふ時に、稽首申



さく、「僕は今より以後、汝が命の晝夜の守護人となりてぞ仕へまつらむ。」と申しき。

二 非時の香果

天皇垂仁天皇三宅連等の祖名は田道間守を常世の國に遣はして、非時の香果を求めしめ給ひき。かれ田道間守、遂にその國に到りて、その木の實を採りて、縵八縵矛八矛を將ちてまる來つる間に、天皇は既に崩御りましぬ。こゝに田道間守、縵四縵矛四矛を分けて、大后に獻り、縵四縵矛四矛を、天皇の御陵の戸にたてまつりおきて、その木の實をさゝげて、叫び哭びて、常世の國のときじくのかぐの木の實を持ちて、參上りてさもらふ。」と申して、遂に叫哭び死にき。その非時の香果といふは、今の橘なり。此の天皇御年一百五十三歳、御陵は菅原の御立野の中にあり。

縵八縵、矛八矛。

三 向火

こゝに天皇景行天皇また頻きて倭建命に、「東の方十二道の荒ぶる神、及従ろはぬ人どもを言向け和平せと詔り給ふ。かれ命を受けたまはりて罷り出でます時に、伊勢の大御神の宮に參りまして、神の御門を拜み給ひける時に、其の御姨倭媛命、草薙の劍を賜ひ、また御囊を賜ひて、若し急の事あらば、此の囊の口を解き給へ。」とも告り給ひける。

かれこゝに相模の國に到りませる時に、其の國の造詐りて申さく、「此の野の中に大沼あり。此の沼の中に住める神、いたくちはやぶる神なり。」と申す。こゝに其の神を看そなはしに、其の野に入りましつれば、則ち其の國の造、その野に火をなもつけたりける。かれ欺かえぬと知ろしめして、かの御姨倭媛命の賜へる御囊の口



焼津  
駿河國志太郡藤  
枝の東六軒  
走水の海  
走水は相模國三  
浦郡浦賀町、觀  
音崎の海面。

を解き開けて見給へば、其のうちに火打ぞありける。こゝに先づ  
其の御刀をもて、草を刈りはらひ、その火打をもちて、火を打ち出で、  
向火をつけて、焼き退けて、還り出でまして、其の國の造どもを皆斬  
り滅ぼし、即ち火をつけて、焼き給ひき。かれ今に焼津とぞいふ。  
そこより入り、いまして、走水の海をわたります時に、その渡りの  
神浪を立て、御船たゆたひて、得進み渡りませず。こゝに其の後  
御名は弟橋媛命まをし給はく、我御子にかはりて海に入りなむ。  
御子は任けの政遂げて、覆奏まをし給ふべし。と申して、海に入りま  
さむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、絹疊八重を、波の上に敷きて、其  
の上に下りましき。こゝにその荒浪おのづから伏ぎて、御船得進  
みき。かれ其の後の歌はせる御歌、  
さねさし、相模の小野に、もゆる火の、火中に立ちて、  
問ひし君はも。

酒折の宮  
甲斐國西山梨郡  
里垣村大字酒折  
此のつき歌の古  
跡は今の酒折神  
社の上約三百米  
の所にある。

坪内逍遙  
文學博士  
名は雄藏  
名古屋の人  
昭和十年歿  
年七十七

そこより入り、いまして、甲斐に出でて、酒折の宮にまし〜ける  
時に、歌ひ給はく。  
にひばり、筑波を過ぎて、幾夜か寝つる。  
こゝに其の御火焼の老人、御歌をつぎて、  
日々なべて、夜には九夜、日には十日を。  
とぞ歌ひける。

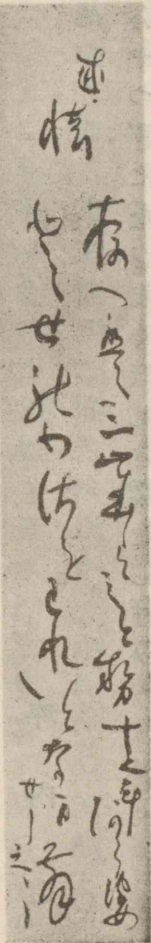
一六 いやつぎに

坪内逍遙

いやつぎになさまくほしき業をしげみ  
老いぬとおもふいとまもあらなく



我みづから人にならばてつくるてふ  
このすさみなくはわれ生けらむや



蹟筆遙道内坪

人の世のおもひは遠く老いらくの

來む日はちかしせむすべもなき

大 西 祝

道の邊の草にも花はさくものを

人のみあだに生れやはする

天地のしらべはいかに高くとも

澄める心にかよはざらめや

述懐  
存へば三年はみと  
せ十年あらばと  
せのわざをわれい  
となまむ  
せうえら

ゆけどく、到らぬ  
空をしたひてもの  
ぼるや人の心なる  
らん  
操 山

天地をつなぐおきてのかしこさは

ふれて碎けぬものなかりけり



蹟筆祝西大

森 鷗 外

京はわが先づ車よりおり立ちて

古本あさり目をくらす街

をさな子の片手して弾くピアノをも

聞いていさゝか楽しむ我れは



奈良人は秋の寂しさ見せじとや  
社も寺も丹塗にはせし

をしねほす賤が小庭に枝たわみ

柚の實柿の實色づきにけり

### 一七 須磨の秋風

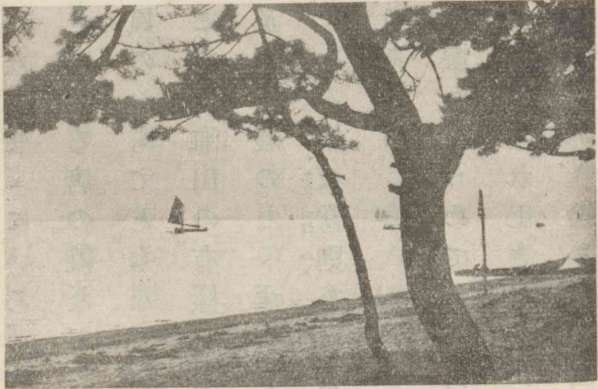
(源氏物語)

關ふき越ゆると  
いひけむ浦波、  
よる／＼はげに  
いと近く聞こえ  
て、  
波たゞこゝもと

須磨にはいと心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、よる／＼はげにいと近く聞こえて、またなく哀れなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、皆うちやすみ渡れるに、ひとり目をさまし給ひて、枕をそばだて、四方のあらしを聞きたまふに、波たゞこゝもとに

に立ち來る心地  
して、

立ち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少しかき鳴らし給へるが、我れながらいとさごう聞こゆ



今 須磨の海岸

れば、ひきさし給ひて、  
こひわびて  
泣く音にまがふ浦波は  
思ふかたより風や吹くらむ。  
と歌ひ給へるに、人々おどろきて、めでた  
う覺ゆるに、しのばれて、あいなら起きる  
つゝ、鼻をしのびやかにかみわたす。  
げにいかにも思ふらむ、我が身一つによ  
り、親兄弟片時立ち離れがたく、程につけ  
つゝ、思ふらむ家を別かれて、かく惑ひあ  
へるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思



つれづれなるま  
まに、いろ／＼  
の紙をつぎつ  
つ、手習をし給  
ふ。

御目に近くては  
げに及ばぬ磯の  
たゝすまひ、二  
なく書きあつめ  
給へり。

ふらむとおぼせば、晝は何くれと戯れごとうち宣ひ紛らし、つれづ  
れなるまゝに、いろ／＼の紙をつぎつ、手習をし給ふ。珍らしき  
さまなる唐の綾などに、さま／＼の繪どもを書きすさび給へる屏  
風のおもてどもなど、いとめてたく見どころあり。人々の語りき  
こえし海山の有様を、はるかに思しやりしを、御目に近くては、げに  
及ばぬ磯のたゝすまひ、二なく書き集め給へり。この頃の上手に  
すめる千枝常則など召して、作繪つかうまつらせばやと、心許なが  
りあへり。

懐かしうめてたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕うま  
つるをうれしきことにて、四五人ばかりぞ、つと侍ひける。前栽の  
花いろ／＼、咲き亂れ、面白き夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、  
たゝすみ給ふ御さまの、ゆゝしう清らなること、所がらまして此の  
世のものとも見え給はず。うち亂れたる御さまにて、釋迦牟尼佛

御涙のこぼるゝ  
をかきはらひ給  
へる御手つき、  
黒木の御數珠に  
はえ給へる、

月の顔のみまも  
られ給ふ。

弟子と名のりて、ゆるゝかに讀みたまへる、また世に知らず聞こゆ  
沖より船どもの歌ひの、しりて、漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのか  
にたゞ小さき鳥の浮かべると見やらるゝも心細げなるに、雁のつ  
らねて鳴く聲、梶の音にまがへるを、うち眺めたまひて、御涙のこぼ  
るゝを、かきはらひ給へる御手つき、黒木の御數珠にはえ給へるは、  
故郷こひしき人々の心地、皆慰みけり。

月のいと花やかにさし出でたるに、今夜は十五夜なりけりと思  
し出でて、殿上の御遊こひしく、所々眺め給ふらむかしと思ひやり  
給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。二千里外故人心と  
ち誦じ給へるに、例の涙もとどめられず、折々の事思ひ出で給ふに、  
よゝと泣かれ給ふ。夜更け侍りぬと聞こゆれど、なほ入り給はず、  
見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ

月のみやこはるかなれども



御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なく書きあつめ給へり。

綱島梁川

思想家、文章家

名は榮一郎

備中の人

明治四十年歿

年三十五

無限に高く獨立軒擧する。

その夜上のいと懐かしう昔物語などし給ひし御さまの、院に似奉り給へりしも、こひしく思ひ出で聞こえ給ひて、恩賜の御衣は今こゝにあり」と誦じつゝ入り給ひぬ。(須磨の巻)

### 一八 愛

綱島梁川

擾々たる人の世を眼下に瞰て、無限に高く獨立軒擧する、これ吾が一の願也。一杯の水をだに、熱き心をこめて、世の哀れなる同胞に頒ち與ふる、これ吾が他の願也。曠達と細心と、白眼と熱誠と、是れ吾が兩つながら獲むと欲する所也。吾れは無限に我れを擴大すると共に、無限に我れを縮少し、無限に我れを肯定確立すると共に、無限に我れを否定抛擲せんことを願ふ。自家實現を理想とする希臘意識と、克己獻身を理想とする基督教意識と、共に攝りて吾の有とす。

自家實現を理想とする希臘意識と、克己獻身を理想とする基督教意識と、共に攝りて吾が一心の有とす。

之れを暗黙の淵に求めて獲ず、之れを深祕の海に尋ねて會はず。



綱島梁川。愛こそは獨りこの名を負ふに堪へた。吾れ、それ愛人、愛神は廣く一切の矛盾を藏めて、深く之れを一樹の根柢に培ふ。我れを殺してやがて活かすものは愛にあらざや。我れを卑うしてやがて高くするものは愛にあらざや。

がて高くするものは愛にあらざや。愛は人生に於いて最も廣き波紋を描くと共に、又最も深く其の心を點破す。又譬ふれば愛は猶ほ高く天翔ける雲と、低く下りゆく水と、末の姿を隔てながら、心一つに澄み通へるが如き乎。古の神人が、一氣高く天地の實在に



迫りて、吾父の意識に躋れると共に、卑く身を世の無告者の間に下だして、其の罪障に涙を灑ぎ、其の弟子の足をさへみづから洗へる、

神と啓  
にたのみ

神と啓

にたのみ

梁川

網 島 梁 川 筆 蹟

是れ豈に愛の大統一力にあらずや。愛を外にしてかゝる莊嚴なる矛盾を結ぶもの復あるべしや。

人ありて、愛は無私ならざるべからず、全く己れを獻ぐる純愛ならざるべからず、若し愛そのものに依りて得る心の喜びをだに一毫計較の中にまじへなば、純愛の全徳既に缺けたるもの也と言はむ乎。されど、誰れか斯くの如き純乎たる無私愛が、吾人の性情に最高満足を與ふる事實を否むものぞ。而して誰れか愛に韜まれたる如是甚深の悦を獲むとは願はざる。己れを獻ぐるは愛の一面の

若し愛そのものに依りて得る心の喜びをだに一毫計較の中にまじへなば、純愛の全徳既に缺けたるもの也。

死の術と共に、生の術を併せ教ふるものは愛也。

み。愛は己れを獻ぐると共に復己れを獲。吾人は吾が全熱愛を鍾むる者の中に、眞生命を見出だし得べきにあらずや。死の術と共に生の術を併せ教ふるものは愛也。愛ばかり己れを遠く抛ち去つて、復近く己れに還らしむる者はあらず。無我と我と、無限に袂を分かちながら左右頭々原に逢ふ者、是れ愛に非ずや。法律の蹄、係は膚寸の我れを捕ふるのみ、良心の聲は我れを憐ましき二元に剖く。それ唯だ愛乎、我れに迫らず、我れを剖かず、衷より密かに我れを煦め養うて、潤澤の一氣、渾然徹せざる所なからしむ。愛は外より法を掲げずして中より自ら之れを成就す。愛に依りて己れを捐つるは、是れ中心喜びて己れを捐つる也。而して中心喜びて己れを捐つる、是れ眞に己れを獲るものにあらずや。義務に依りて己れを捐つるものには未だ中心の喜びあらず。其の喜びには一味の空虚あり、凝滯あり、深からず、周からず。最も富贍なる生



眞に愛の意を描くものは、是れ髣髴、天地の至高者を描くものと謂ふべき也。

野口米次郎

文學者  
慶應大學教授  
愛知縣の人  
明治八年生

PROSE

命は、吾人之れを義務に於いて見ずして、愛に於いて見る也。數多の慘烈なる人生の矛盾に、最も深く且つ豊富なる總合點を與ふるものは、それ唯だ愛乎。眞に愛の意を描くものは、是れ髣髴、天地の至高者を描くものと謂ふべき也。〔病間録〕

### 一九 本阿彌光悦

野口米次郎

將軍家光からは「光悦は天下の重寶」と讃へられ、灰屋紹益からは「此の世の人とも覺えずと仰がれた本阿彌光悦は、長い日本歴史に現はれた人物の中で最も完全に生きた一人であつた。少しも妥協せずに生活し得た偉い人間であつた。彼れはよい意味のエゴイストであつた。しかし彼れの主我主義は、生來濃厚高潔な個性の力で極めてよく哲學化したものであつた。彼れが八十

彼れの一生は沈黙の表象であつた。

幻想の鮮かな人間。

幻想  
Vision



歳の一生は沈黙の表象であつた。即ち彼れは沈黙の言葉で、その主我主義を殆んど完全に歌つて死んだのである。私は光悦位、幻想の鮮かな人間は無いと思つて居る。桃山時代から徳川時代に入つて、殺伐を賣物本にした時代精神も、漸次に野卑な物質主義に變轉した。單純な原始性も、無造作に是認された複雑性の爲めに破壊されようとする状態を否定する彼れの幻想は、彼れをして絶對的に沈黙ならしめた。そして彼れをして靜寂を追求せしめた。彼れの沈黙は決して臆病な降服ではなくして、寧ろ言葉の反抗以上に一層力強い實行的挑戦である。彼れの沈黙は豫言者としての威儀であり品位である。彼れ



瑣細主義  
Trivialism

が藝術の上に於いてばかりで無く、實際の行爲に於いて暗示した瑣細主義の否定は、彼れをして力強く永遠性を掴ましめた。その點で、彼れの豫言者的價値は十分である。彼れの一生は、之れを悠悠として迫らない大海の姿にも比較することが出来る。

勿論、表面上に於ける彼れの靜寂は、決して精神上の讓歩でもなく、又妥協でもない。彼れの單調な行爲は決して内面的人生の疲勞と關聯したものである。實際私は光悅位、充實した精神の所有者が他にあらうとは思はない。彼れが筆蹟に、繪畫に、詩繪に、又製陶に表現した單純性は、複雑性を知らない單純性では無い。自分の經驗で肯定した永遠性の落付いた姿である。彼れは、有らゆる物象に於いて、有らゆる思想に於いて、又有らゆる感興に於いて、自由に選擇の權利を振つた。藝術家として、また人間として、尊い個性を表現することが出来た。私は彼れを祝福せざるを得ない。

自由に選擇の權利を振つた。

私は未だ曾て本阿彌光悅の一生の如く、完全に有機體的に人格が發育して、宛も日月星辰が一定した氣分で動いて居るやうな、渾然たる一大人格の表現を、世界の何處にも見たことが無い。

私は種々な人間の傳記を読み、又日本や西洋の藝術家の完成した色々な仕事の跡を考へた。しかし私は未だ曾て本阿彌光悅の一生の如く、完全に有機體的に人格が發育して、宛も日月星辰が一定した氣分で動いて居るやうな、渾然たる一大人格の表現を、世界の何處にも見たことがない。彼れの外面的行爲は、無條件で、無感激で、而かも時には、理智的であるとさへ受取られる場合もある。しかし、それは彼れの全部のものでは無い。彼れは生前既に大きな權威と認められて、澤山の光悅信者を其の身邊に集めた。彼れの知遇並に交遊の跡を調べると、その當時第一流の大立物が悉く其の中に含まれたかの觀がある。上つ方では徳川家康、加賀侯前田から、尊朝法親王、近衛三藐院並に近衛應山に及び、幕府の重職として、松平伊豆守信綱、土井大炊頭利勝、板倉伊賀守勝重、茶人としては小堀遠江守政一、千宗旦、或は宗拙、碩儒としては林羅山、畫家、書



彼れは世間を超越して世間から離れず、世間と和合せずして世間と親しんだ。

家としては松花堂昭乗、俵屋宗達、弟子としては角倉素庵、佐野紹益、是等知名の人々が、宛も大きな星に對する小さな星のやうに、光悦の周圍を取り卷いた。佛家の如くて必ずしも悲觀的でなく、老莊の如くて必ずしも諷刺的でなく、儒者の如くて必ずしも四角張らず、又歌人の如くて必ずしも感傷的でない彼れの人格が、如何に豊饒なチャームを其等の人々に與へたことであらう。彼れは世間を超越して世間から離れず、世間と和合せずして世間と親しんだ。偉い人格の人で無くて何であらうぞ。

人格の大小を定める尺度はたつた一つある。外でない、他人に對してどんな引力を持つて居るかである。人々は、知らず／＼光悦の引力に引き寄せられて、引き寄せられながら自然に彼れの人格中に、自分の或る物を發見することを喜んだであらう。光悦を圍繞した公卿、武士、學者、僧侶、畫家、茶人、そのいづれもは、自分の影を

偉大なる人格は神祕である。

彼れは藝術を獨立的に取扱は

彼れに見出だして、どんなに喜んだことであらう。偉大なる人格は神祕である。言ひ替へると光悦は神祕であつた。彼れが、此の世の人とも覺えずといはれることが出来る理由も、こゝに於いて容易に知られるであらう。光悦ぐらゐる諸藝に達した人間は、何處を尋ねても二人とはあるまい。そして彼れが手を觸れた如何なる藝術にも、謂はゆる商賣的の臭味がこびり付いて居ない點に、彼れが最高位の好事家たる香りが香つて居るのである。勿論彼れの藝術は、彼れの筆蹟にしても、繪畫にしても、蒔繪にしても、製陶にしても、彼れの人格の様々な變化には相違ないが、彼れの人格そのものは、彼れの藝術よりも更に大きく、深く、且つ、高かつた。そして其の理由は彼れの好事家振そのものにあるのである。私は彼れの藝術に對して、その表現の實力を疑ひ又輕んずる者ではないが、彼れが、藝術を獨立的に取扱はずして、如何なる場合に於いても、自



ずして、如何なる場合に於いても、自分の人格を暗示すべき前奏たらしめた點に、最大の敬意を表するのである。

鷹峰

山城國愛宕郡鷹島村

見渡せば  
藤原定家の作

骨を噛むやうな寂莫境の唯美主義者ではなく、實に洋々として、春のやうな平和な光線が漲る初秋氣分の大逸民であつた。

分の人格を暗示すべき前奏たらしめた點に、最大の敬意を表するのである。彼れは何處までも整理の人であつた。整理の人であつたから、彼れ位自然と人生との價値を、正當に、平均に査定し得た人はないのである。故に個人としての彼れは、寡慾淡々として情誼に厚く、親には至孝に、嚴肅な尊皇心を胸中に守つて、神佛に對する敬虔心が深く、そして又顯貴に對しても、無意味に屈しないだけの力強い自信力があつたのである。元和元年六月、五十八歳で鷹峰に移住して、云はゞ退隱生活に入つた彼れを見ても、謂はゆる、見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれで、骨を噛むやうな寂莫境の唯美主義者ではなく、實に洋々として、春のやうな平和な光線が漲る初秋氣分の大逸民であつた。

『本阿彌行狀記』賑ひ草等に書いてある彼れの挿話の數々を讀むと、松平伊豆守が言つたやうに、光悦一人本性たがへじて、極めて強

光武皇帝  
後漢の世祖

健實直な倫理を守り、卑しい時流を遙かに超絶した、實に麗はしい心の尊皇家であつたことが知られる。そして此の道德家たり、立派な經世家ともいふべき彼れの半面が、彼れの藝術心を少しも傷つけず、又混亂せしめなかつた所は、特に吾々の注意すべき點である。彼れは家康の知遇に依り、鷹峯の所領百七十六石八斗一升を貰つて、かの朝にては光武皇帝、我が朝にては東照公、かゝる世に生れたるは幸福なり」と、家康の盛徳を讚嘆した彼れの言葉は、江戸表へ引越の儀はゆめ／＼あるべからず、日本國中は神の御末にて、皆々禁裏様のものなり」といつて、子孫の江戸移住を嚴禁



本阿彌光悦の畫と筆蹟



した態度に對し、別に矛盾でも撞着でもなかつた。彼れは私情の爲めに、尊皇心と徳川家に對する敬愛心とを混合せしめなかつた。彼れは實に「本性たがへじ」の潔士であつた。

彼れは義朝、頼朝、時政、義時、ついで信長、秀吉などの尊皇心の稀薄であつたことを責め、日本は神代より禁裏様の物と申す事を忘れて、皆御代短し、神國の妙といふべし」と一斷案を下して居る。彼れは和氣清鷹、ずつと降つては、彌平兵衛宗清、河津祐清、名和伯耆守長年、別けても楠正成を古今無類の忠臣だと云つて稱讚した。彼れは「禁裏様の御劍を清め、總て御用を勤め來りし事何程が難有事にて候」と感涙に咽んで、父光二時代からの御所の御用を一向專念に承つた。彼れはまた嚴重に、女子の縁で立身出世してはならぬと云つて、一家一門を戒めた。彼れの清廉寡慾は實に清淨教的のものであつた。灰屋紹益の「賑ひ草」の中に、光悦は世を渡るすべ

彌平兵衛宗清  
河津祐清

共に逆境時代の頼朝に情をかけたれども、頼朝天下統一の後、恩賞に預かるを辱しとせざりし平家の侍。

清廉寡慾。

Wordsworth

英國の詩人  
(1770—1850)

彼れは清い生活の人であつた。簡素な生活と高尚な思想の人であつた。

Simple living and high thinking

生さらに知らず。金銀手にのせること、昔加州の大納言直に判金を賜ひければ、手に取りていたゞきたるを覺えたり。其の外一度も手に持ちたることなし」と云ひ、又「光悦世の中のわざとては一ことも知らず、心にもなし、我れはさこそすべけれどこしらへたるに更になくて、生れ得たる心のいさぎよきにてぞありける」といつて居るが、多少の誇張があるにしても、彼れの高潔な心事を證明するに餘りあるといへる。

彼れは清い生活の人であつた。ウオヅウオスの所謂簡素な生活と高尚な思想の人であつた。彼れが晩年の病褥を、屢、板倉伊賀守父子が見舞つて、彼れが着てゐた木綿の夜具蒲團を見て感服したと、「本阿彌行狀記」に書いてある。又「光悦が身に奇特なること多けれども、學び難きことは二十歳計りより八十歳にて相果て候までは、小者一人飯焚一人にて暮申候事也。此故に一生諂ひ申さず。



とある言葉の眞實も、容易に信ずることが出来ると思はれる。彼れは鷹峯へ引込んだ際に、家財調度の目星しいものをば、擧げて、一家の者或は入魂の友人等に與へて仕舞つた。人が何故にそんな無鐵砲をしたかと質問に及ぶと、彼れは、さればさ、良い道具となる、と落してならぬ、毀してならぬと、口穢く喋らねばならぬ、其の氣苦勞が一方ではない。粗末のものさへ使用して居れば、その心配から逃れられる。と答へたといふ事である。かう成つて始めて、彼れの寂びた高雅な大人格も、その圓熟期に入つたと見る事が出来る。しかし彼れには茶道の名品を蒐集しようとした時代もあつた。いつの頃の出來事だか知らぬが、彼れは黄金三十枚で、小袖屋宗是茶入を手に入れた。彼れは早速茶をそれに入れて伏見へ出掛け、加賀大納言利家の息利長公の御目に懸けた。利長公は、さて、これは結構な茶入だと感嘆されて、光悦が歸らうとした

時に、横山山城守といふ臣下に命じ、白銀三百枚を取り出して、その茶入を所望させた。彼れは即座に辭退した。そして、數年來御蔭を以てため置いた銀で求めたものゆゑ、といつて拜領しなかつた。歸宅後この事を母の妙秀に話さうとすると、妙秀は聞き終はらぬ中に、お前は、その銀を拜領したか、と云つて、光悦を睨みつけた。そして、光悦の語を聞き終はつて、よくこそ御辭退申上げた。若しお前がその三百枚を拜領したならば、お前の茶人はそのまゝ廢つたであらう、といつて、倅光悦の見上げた心を非常に喜んだといふことである。彼れには耳を澄まして謹聽すべき議論が澤山ある。彼れは秀吉を論じてかう云つて居る。常に御使被成候人々も、格別賤しき足輕仲間等にもぬけ候者は無之、たとひ適に有之とても、我が朝にては代々其の家柄の者の内



より役儀等被仰付候事にて、人才に御不自由はなければ必ずく下賤御取立御無用歟と奉存候。恐れ多き事乍ら、太閤秀吉公古今獨歩の名將にて候へども、唯御自分の智恵計りにて御一代御取計遊ばされ、我を忘れ給ふ故に、神代より例無き攝家を差置、二代關白に備はり給ふと雖も、秀次様御人にあらず、御父子の滞りより官位御辭退もなく、高野山にて御生害、彼はつまらぬ御政道故、御代短く、偏に君と神との罰を蒙り玉ふと、信長公の御公達へ不忠故、天より御代を短く御取計の事と恐ろしき事也。是れ下賤より立身し給ふ上、御一代智術にて、不義を人は知らぬかと、自身御高慢故、諫を聞入れ給はず。奈良の大佛御建立と當所大佛御建立と、雲泥の違と奉存候。唯今に大氣と云はれん爲めに諸國の難儀を構はず御建立の大佛殿こそ、涙もこぼるゝ事共に候。夫れのみならず朝鮮陣なども、假令御利運に成り候ても大海を隔て候て御爲めにもな

大方は秀頼様を  
みつき不申、是  
れには意味ある  
事にて、つまる  
所は太閤様の御  
不徳に奉存候。

らねば、是れ大佛殿と御趣意同じき歟。其の上御自身は信長公へ不忠にして、秀頼公へ無二の御奉公仕るべき由にて、誓詞等被遊候義理の事、大きに違ひ候事にて御座候。御取立の大名小名もそれ故大方は秀頼様をみつき不申、是れには意味有る事にて、つまる所は太閤様の御不徳に奉存候。よき人々のいましめと奉存候。これ等の論評は、光悦が手紙で松平伊豆守信綱へ贈つた進言中のものである。彼れが所司代板倉重宗の邸で信綱に遇ひ、直接進言したといふ意見も、兎角慈悲深くおとなしきが誠の人間にて御座候。といふ點を根柢とした政治論であつた。彼れは、萬民樂しみ不申候へば、目出度き御仕置にては無御座候。とも云つて居る。彼れは學才と行爲との不一致を痛論して、邪智の者は學文にていよく、邪智と成り、愚なる者どもは只だ物知りと成る迄にて、學文の本意を我が物として、今日の事に取直し用ゐる候人は甚だ稀な



る物にて、多くは學才と身の行と二筋の川の様に相成候。と云ひ、また「杜甫李白の詩は上手に候へども、その一生も餘り事足り候人と、も不被存候」と語つて居る。また彼れは「今時めける林道春など、上宮太子をそしり、兼好法師のつれづれ、草源氏物語をそしらるゝが如きも、我々にはをかしくこそ候へ」と罵倒して居る。彼れが傳來の家業は、刀劍の鑑定、磨礪、淨拭の三事であつたが、一面に於いては哲學者であり、また論理學者であつた。而して其の上には法華經の信仰によつて、力強い確定力を掴み、そして自分の努力を如何に節儉し、又それを如何に有利に表現すべきかの祕密を學んだのである。彼れの繪畫や書、その他いかなる藝術の表現を見ても、皆かやうな宗教的信仰がその根柢となつて居る。彼れは生命の方面を成るだけ露骨に顯はさず、死の寂寞な音律でその藝術を永遠ならしめて居る。彼れの藝術位暗示に豊富なものは

彼れの信ずる藝術は祈禱の一種であつた。

細井平洲

江戸時代の儒者  
尾張侯の備官となり、後上杉治憲のために藩校設立に力を盡くす。享和五年歿年七十四

今侯

上杉治廣

老侯

上杉治憲

鷹山と號す

市谷

ない。その點からいふと、彼れの仕事は表象的であつたといふことが出来る。そして彼れの表象的の半面は、彼れが何處までも日本人であるといふ所から生れて居る。彼れは自分の藝術を何處までも粗末にはしなかつた。彼れの信ずる藝術は祈禱の一種であつた。告白であつた。

(『日本美術讀本』に據る)

二〇 泣かざるべけんや

細井平洲

愚老去る八月二十五日東都發足致し候。此の行は偏に米澤今侯老侯への御孝心より事起こり、久々御面談も申さず、老侯常々遙念已まざ候につき、今侯其所を甚だ勞念有之候て、急度市谷へ願達有之候につき、市谷にても甚だ孝心を感心致され候故に、大儀ながら下向候様に申し渡され、日限の儀も、彼の地の用事相濟み候迄は、



市谷  
江戸四ツ谷  
尾張侯邸所在地  
七十老を忘れ百  
里の旅も存じ  
立ち候。

義以爲レ質。禮  
以行之。  
平洲紀徳民

心次第に逗留致し候様にと、細々申し含められ、元來生涯に今一度  
老侯へ對面致し度本心下悞にも相叶ひ候につき、七十老を忘れ、百  
里の旅も存じ立ち候事に候。刀禰川たぬがわ以東驛々ががにても、逆旅主人  
往々志有之者も御座候て、米澤聖君様の御師匠様と申し唱へ、逢ひ  
に罷出でし者も多く、宵に参りまた朝に夜を込めて途中迄禮服に

義以爲質禮以行之

平洲紀徳民

細井平洲筆蹟

て送り候者も有之候。これに依つて米澤侯の徳隣國に布き申し  
候様子共感心致し候。十一日振りの旅行、九月五日に南境板谷關いたがき  
に至り候所、國校の督學神保行簡かみ前日より罷出で命を以て勞し申  
し候。翌六日に嶺たかねを下り、府城より三里大澤と申す驛に至り候所

老淚滿眼。  
一向無言にて涙  
滿面。  
足指仰ぎ申し  
候。

老侯親しく郊迎の沙汰相聞こえ候に付き、急ぎ候て八つ過ぎに羽  
黒堂と申す驛に至り申し候。此所は南郊一里五六町も府城を距  
り申す所に候。最早侯の儀衛遙かに相見え候につき、五六町轎を  
下り歩み申し候所、普門院と申す寺の門前に、兩傍に雲從俯伏、侯は  
路の中心に立つて相待たれ候。進んで拜し申し候所、愚情は地に  
手して拜したく存じ候へども、侯の態度左候はゞ地に手して答拜  
可有之様子故に、是非なく足跣に手して拜し申し候。先づ何の言  
もなく老淚滿眼に御座候。侯も一向無言にて涙滿面、先生御安泰  
と計りにて、御案内申すべしとて、寺門に入られ候。外門より中門  
迄足指仰ぎ申し候。三町計りの坂に御座候。聯歩にして進み申  
し候。中々一步も前行は無之候。杖を進められ候へども辭して  
杖かず候間、若しやつまづきも致すべき哉との心遣と相見え、手を  
引かぬ計りに比肩して進まれ候。堂に上り候節、御案内と申され



於是愚老なる者  
豈泣かざるべ  
んや。

萬葉は我が最古  
最大の歌集であ  
る。

候て、階を上り、堂板に坐し、俯伏して待たれ候。夫れより座に上り候時、是れは例御存知の通り、辭讓久しく候て、漸く對座に相成り、いろ／＼言も出て候て、御互に言語に及び申し候。杯進み候て、例の通り進じ申し候て、献酬も相濟み候。今日近傍の村民老少となく、田畔に伏して儀を觀申し候者、嗚呼の聲ばかりにて、皆々落涙、飲泣の聲啾々と聞こえ候へば、侯の徳民心に感戴のところは、是れにて相知れ申し候。於是愚老なる者、豈泣かざるべけんや、豈泣かざるべけんや。

## 二一 萬葉集に現はれたる純眞愛

萬葉集は我が國に於ける最も古き歌集で、同時に最も大いなる歌集である。従つて其の興味は限りなく多くの方面に見出ださ

萬葉以前の歌は  
眞情は現はれて  
居るが、磨きが  
足らぬ。萬葉以  
後の歌は、詞は  
きれいだが生  
命がない。萬葉  
は其の中間で、  
眞情が磨いた詞  
に現はされて居  
る。

れるが、其の最もおもなる一つは、眞情を磨いて現はした點にあるであらう。萬葉以前の歌謡は直情直抒で、眞情が現はれては居るが、生のまゝ、投げ出されたといふ形で、まだ藝術的洗練の加へられぬ傾きがあつた。萬葉以後の歌詠は、至極の洗練を加へられては居るが、其の内容には生氣がなくして、月並の空感を調子のよい美辭に現はしたといふ嫌ひがあつた。萬葉は丁度此の二つの中間に位して、一方から見れば、眞情が生き／＼と現はれながら、生のままには投げ出されずして、立派に藝術的の洗練が加へられて居り、他の一方から見れば、詞も想も立派に磨かれながら、まだ少しも月並な形式化の弊に陥つてゐない健かさがある。この内容外形が極めてよく一致して、時の人の眞情を藝術的に現はして居る所、これが萬葉の長へに人を引きつける力の一つであるが、此の集の歌が、取りわけ我々の心を深く動かすのは、純眞なる愛の濃かに現は



子に對する父親の愛の現はれ。

れた點にある。此の特色は此の集全體に通ずるもので、見様によつては、卷頭なる雄略天皇の御製から最後なる大伴家持の歌に至る四千四百九十六首、悉くかやうな愛の現はれといふことも出来るが、試みに其の中から殊に著しい數首を選んで見ると、  
まづ子に對する親の愛の現はれたのには、山上憶良の「思子等」歌と題する名高い長短歌がある。  
瓜食めば 子どもおもほゆ、栗はめば ましてしのばゆ、中いづくより 來りしものぞ、眼交に 見もとなかゝりて、安寝しなさぬ。

反歌

白金も黄金も珠も何せむに、  
勝れる寶子にしかめやも。

大意は、瓜を食べれば、子供が思ひ出される。栗を食べれば、尙の事偲ばれる。一體此の「子」といふもの、何の縁によつて何處から來たものであらう。事ある毎にわけもなく、目先にちらつきちらついで、おちく／＼と心安くも寝させぬとは。  
あゝ此の子供に比べると、金銀珠玉が何するものぞ。勝れた寶は世に數あるが、子にます寶はとても無い、とても／＼無い。といふ事である。言つて居る事は極めて簡單であるが、純なる親の愛情が、實によく渾然と現はれて居るではないか。

憶良にはまた「罷宴歌」と題して、  
憶良らは今は罷らむ子泣くらむ、

といふ作がある。宴席に在つて、高歌亂舞の賑やかな騒ぎの中に、そゞろに家庭が戀しくなつたのであらう。「私はもう此の席を引



き下る。家には父を慕うて、子が泣いて居るであらう。其の子の母も、子をなだめつゝ、自分を待ち兼ねて居るであらうに。」と云ふのである。また同じ人の作とも云はれるのに、幼兒を喪つた折の歌として、

幼ければ道行き知らじ幣はせむ、

したべの使負ひて通らせ。

といふのがある。「まだ頑是ない子だから、天上極樂へ行き通ふ道は、よう知るまい。御禮は屹度する程に、冥府の使人よ、どうぞ我が歿くなつた子を負つて、滞りなく天國へつれて行つて下さい。」といふのである。子に對する純なる親の愛情が、いづれにもく、しみじみする程よく、深く、美しく現はれて居るではないか。そして其の詞がよく磨かれて居りながら、眞情がよく現はれて、しかも形式的に文字を弄ぶ弊が少しも見えてゐないではないか。

子に對する母親の愛の現はれ。

母親の慈愛の現はれたものでは、天平五年に遣唐使の一行が難波から船出する時に、隨行者の一人の母から、其の子に贈つたといふ歌がある。

秋萩を 妻問ふ鹿こそ、一人子を持たりといへ、鹿兒じもの 吾が一人子の、草枕 旅にし行けば、竹珠を 密に貫き垂れ、齋瓮に 木綿取りしてて、齋ひつゝ、吾が思ふ吾子眞幸くありこそ。

反歌

旅人の宿りせむ野に霜ふらば、  
吾が子羽裏め 天の鶴群  
大抵の獸が、同時に多くの子を産む中に、萩の盛りに啼く鹿ばかりは、一腹にたつた一つ子だけ生んで、そして脇目も振らず懸命に



可愛がるといふことだが、あゝ其の鹿の子同様な一粒種の我が一人子が、今度海越え山越えて、遠いく唐土へ旅するのだ。其の悲しさに母親わが竹の切玉緒に貫き垂らし、清めた瓶には美酒を満て、木綿の清布下げしだらして、さて神々に祈り禱る其の事は、いくしの我が子恙なかれとばかり、我子の行く手に幸あれとのみ。遠い旅する一行の、宿りする野に霜降らば、空飛ぶ鶴よ、汝等が、廣い羽翼に、我がいとし子、一人子の身を蔽うて給もといふ事である。旅行く愛子の身の上を案じ煩ふ女親の切なる愛が、其の美しい表現と相伴つて、汲むに盡きせぬ味はひを見せて居るではないか。

夫婦の情愛の現はれ。

吾々は轉じて、此の集に於ける夫婦の情愛の現はれを見るであらう。歌は渡世の爲めに奈良から山城へ通ふ若き夫婦の唱和で

ある。

次嶺經 山背路を、人夫の馬より行くに、己夫の歩より  
行けば、見る毎に音のみし泣かゆ、兼そこ思ふに一心し痛し、  
垂乳根の母が形見と、吾が持たる眞澄鏡に、蜻蛉領巾  
負ひ並め持ちて、馬買へ吾が夫。

反歌

馬買はゞ妹歩行ならむよしゑやし、  
石はふむとも吾は二人行かむ。

意味は「嶺々つゞきの山城路を、他の殿御が馬に乗つて樂々と行き通ふ其の間に、我が夫愛する君が、歩いて惱んで行かれるのを見ると、見入るたんびにホロリとする。それを思ふと胸が痛んで、張り裂くるばかり。わたしの鏡は垂乳根の母の形見、大事の眞澄の鏡だが、あれに蜻蛉の羽のやうな美しい、薄いすかしの領巾を添へて、負



うて、持行  
つて、賣り  
しろなし  
て、馬を買  
うて乗つ  
て下さい。  
吾が殿御  
よ。と妻が  
いふと、夫  
の答は、

石室首

次嶺山背道半人勅末乃馬行りみし夫し  
未行り名毎見決りし而は泣曾許思ふ心を  
痛く出乳根乃女く不見ぬ此吾持有十見  
鏡不精精領中願並持る替吾替吾肯

元曆本萬葉集

「馬は買ひもしようが、買つた上で私が乗つたら、御身一人が、歩く事になるではないか。まあ好いわね、石ころ踏んで足は痛めても、二人で行かうよ、ねい二人で歩いて行かうよ。」

といふのである。我々は之れを讀む毎に、いつも打たれてついホロリとさせられる。夫婦の情愛のこれほど美しく現はれたのが、我が國の歌にまたとあるであらうか。

吾々は最後に、君臣間の情愛の現はれたものとして、殊に大君の臣下に對する御慈しみの美しい現はれとして、聖武天皇の御歌を引きたい。御歌は、天平四年の八月、節度使等が勅命を奉じて地方政事の監察に出かけるに臨み、慰勞の宴を賜はつた折に下されたものである。

食國をの 遠はの 朝廷に、 汝等し かく 退行りなば、 平らけく  
吾はは 遊ばむ、 手た抱だきて 吾はは いまさむ、 天す皇み朕わが 高た嚴げの 御  
手て以も、 かき撫なでぞ 勞はぎたまふ、 打うち撫なでぞ 勞はぎたまふ、  
還かり來こむ日 相飲あひまむ酒さぞ、 この 豐と御み酒さは。

大君の大愛の嚴かな現はれ。



反歌

ますらをの行くちふ道ぞ凡かに  
思ひて行くなますらをの伴。

大御心の大要は、朕が治る國の、遠隔の地方々々に、頼もしい卿等が、かうして都を離れて行つてくれ、ば、おかげで朕は平穩無事に、かうして遊んで居られるといふものだ。手を拱いて樂に暢氣にして居られるといふものだ。そこで、天つ日嗣の皇帝朕みづからが、この通り尊い立派な手を以て、卿等をかき撫てては、イヤ御苦勞であるぞと云つて勞ふのだ。打ちさすつては、宜しく頼むぞよと云つて勞ふのだ。よいか、今飲む此の酒は、他日卿等が任を果たして復命をするその日に、再び酌みかはす酒であるぞよ。このあまき豊けき大御酒は。

卿等が今度の地方行は、朝命を奉じ、大任を負うて、選ばれたる大

丈夫の行くといふ、重き赴任の道であるぞよ。好い加減に思つては行くまいぞ。汝、大丈夫兒のますらを達よ。

大體、かやうな聖旨であらうかと拜察する。「お、好い子だ。感心もなく慰むであらう。而してかく慰む子等を見て、親も亦同じく身も世もなく樂しむであらう。聖武天皇の聖旨は、この慈父の心を擴大し、高天原以來の積徳重威によつて、かやうに新らしい職務にいたづかうとする臣下を撫て慈しみ給うたのである。建國以來、正しきを養ひ、慶きを積み、暉きを重ぬる中に、いつしか成立つた、斯様な君臣融和の情愛を、美しい御詞に現はさせ給うたのである。吾々は之れを拜唱する毎に、君臣相愛の大和心の一面が、凝つて此の大御歌となつたのではないかと思ひ、また我が國體の根本基礎の一部分が、此の大御歌の中に於いて、美しき具體的説明を得て居るのである。

建國以來、正しきを養ひ、慶きを積み、暉きを重ぬる中に、いつしか成立つた君臣融和の情愛を、美しい御詞に現はさせ給うたのである。



るのではないかと思ふ。

以上は萬葉五千首に對して、ほんの滄海の一粟を拾ひ上げたに過ぎぬが、此の國寶歌集の歌に於いて、時人の眞情がいに磨きをかけて現はされて居るか、我々の祖先の有つてゐた純眞純美の愛情が、いかに美しく現はされて居るかは、ほゞ之れによつて窺はれるであらう。同時に此の集の歌群うたぐらに限りなき價值のある所以、及び此の集の研究に生涯を抛つ人の多くある所以を理解することが出来るとであらう。

### 二二 大隈重信

中村吉藏

登場人物

中村吉藏  
劇作家  
舊號春雨  
石見の人  
明治十年生

伊藤博文  
當時内閣總理大臣

黒田清隆  
鹿兒島の人  
明治二十一年四月  
總理大臣となる。  
當時農商務大臣  
明治三十三年歿  
年六十一

大隈重信

伊藤博文

黒田清隆

女中、取次等

時 明治二十一年春

舞臺は洋風應接室、ストーヴ、卓、脇掛椅子。下手の窓から學校の一角が見える。西洋花卉の鉢が飾られてある。取次の者が、フロツクコート姿の伊藤博文をこの室へ案内して、ガス燈の火を點して退る。博文は、悠然とシガーを煙らしながら、西洋花卉の鉢に目を附け、それから一方の窓の外をヂツと見てゐる。戸外はほの明るい月光。大隈（和服姿で入つて来て、快濶に聲をかけ）やア、ようこそ。……伊藤（無造作に）やア、このあひだは失敬……何うだね？ さうぢらさんでも可いだらう。大抵にしてウンと云つてくれ給へ。



肩の荷が下りぬ。二の足をふむ。

君がウンと云つてくれんぢや、吾輩、何時までも肩の荷が下りんで困る。黒田の奴も、後の内閣を引き受けるのに二の足をふんでるんだし、あの強情ツ張の井上も、此の際、君でなくつちや條約



改正の後始末の附け手はないか  
中 らつて、是が非でも君を引ツ張り  
村 だせと、やかましく云つてるんだ。  
吉 まア萬事、行きがかりは水に流し  
藏 て、國家の爲めに一肌ぬいで貰は  
うぢやないか？

まア萬事、行きがかりは水に流して、國家の爲めに一肌ぬいで貰はうぢやないか？

大隈 (快潤に笑つて) ハ、それが、一肌ぬぐ位ぢやアすまないんだよ。條約改正は生命取だからな。

伊藤 (やゝ嚴肅に) まかり間違へばさうなるだらう。…何しろ安政以來、三十年間も國家の内臓に喰ひ込んでるガンだ。こいつを

岩倉公

明治の元勳  
大勳位公爵  
名は具視  
明治十六年歿  
年五十九

寺島

名は宗則  
伯爵  
特命全權公使  
宮中顧問官  
樞密院副議長  
鹿兒島の人  
明治二十六年歿  
年六十一

井上

大勳位侯爵  
名は馨  
長州の人  
明治十八年外務大臣となり、明治二十年辭す。  
大正四年歿  
年八十一

一日も早く取り除けねば、この先、日本は、世界列國の間の落伍者になるばかりだ。お互が身命を抛つて、も、飽くまでやり遂げなげやならん大事業ぢやアないか？ 岩倉公も失敗したし、寺島も失敗した。こん度の井上もあんな羽目になつて、餘儀なく手を引いたが、この上は、君より外にやる人はないんだ。君がウンと云つてくれなげや、國家といふ病人を見殺しにするのも同前だ。今こそ君が御奉公の仕時ぢやアないか？

大隈 そいつは何も今度の事に限つたわけぢやアないだらう。日本の今日の政治は民衆を基礎としてやつて行かなげやならん萬機公論に決する維新の御主意を徹底させろといふのが、吾輩の持論なんだ。誰れも、彼れも、無差別に國家に御奉公するやうな途を開かなげや嘘だ。日頃は薩長だけで日本の政治を勝手にする、イザ事が六つかしくなつて、天下の輿論が沸騰するとほ



こりまみれの吾輩を、早稻田の隅から引ツ張り出して、彈丸よけの楯に使はうとする。これぢや、いかな木佛金佛だつて、おかんむりを曲げるだらう。チト蟲が善過ぎるぢやないか。ハ、ハ、ハ、

伊藤 イヤ、君の議論は決して無理だとは思はん。吾輩もそこを考慮してゐるんだ。それに、憲法發布も愈、一兩年の後に迫つて來てゐるし、帝國議會が開けたら、勢ひ民衆政治になつて行かないやならんだらう。その下準備の爲めにも、此の際、君が入閣して、吾輩等と協力してやつてくれられるのが、志を實行する端緒にもならうぢやアないか？……黒田が後を引受けて首相になつても、そんな事にかげちや方角が立たないんだから、是非共君が大局を指導してくれなけや、皆安心が出来ないんだ。

大隈 (笑顔で) そいつは度々聞かされたし、君がこの難局を繕ふ

一旦義を見て立つたが最期、たとひ負戦になつても、メツタに逃げ隠れはせん。

爲めに、吾輩をお調子に乗せようといふ氣で云つてるのでない事も承知してゐる。……承知してはゐるが、率直に云ふと、君に限らず、一たい長州人は皆才子揃ひだ。眼先は敏速く利くが、イザとなると逃足も早い。そこへ行くと吾輩は野武士だから、一たん義を見て立つたが最期、たとひ負戦になつても、メツタに逃げ隠れはせん。イヤ、戦場に屍をさらすまで、後へは退かぬ馬鹿正直な處のある人間だよ。それ丈、立ち際にはウンと考へる。始めから馬鹿を見る氣で取りかゝられる仕事ぢやアないからね。伊藤 そりや大きにさうだ。……しかし、長州人を才子揃ひツていふのは、チト恐入つたね。ハ、ハ、ハ、外面からは才子に見えるか知れんが、その實、馬鹿正直なところがあり過ぎて困るんだ。吾輩にしろ、又井上にしろ、さうぢやアないか？ あいつは、いつも疳癩玉を爆發させるし、吾輩は又……新聞屋の三面記事の卸し



問屋にされてるんだからな。ハ、、、。そこにかけちや、君の方がズツと利巧だよ。

大隈 ハ、、、。まあ、その草花を見てくれ給へ。美しいだらう。吾輩のたんせいだ。

伊藤 又益裁論かね。ハ、、、。そいつは又日永に聞かう。……ところで何うだい？ 過去は一切、水に流して、この際、吾輩の顔を立て、くれ給へ。頼むよ、これこそ薩長の爲めぢやアない、國家の前途の爲めだ。日本國民の百年の長計の爲めだ。潔く、ウンと云つてくれ。……即座に返事を聞かせてくれ。

大隈 (への字口をして) 即座にと云はれちや、まア御免蒙るとより他に、御返事は出来んな。

伊藤 (黙つて洋酒をヤケ飲みする。……そして窓外にデット目をつけて) 君はやつぱり、あの十四年の事件を、いつも腹の底に持ち越して

百年の長計の爲めだ。

るんだな。今更辨解をするにも及ばんが、あの時は、君が吾輩等を出し抜いて、一人で國會開設の意見書を、宮殿下へ差出したのが事件の起因だつたんだよ。君の急進主義が君を躓かせたんだよ。しかし、その國會開設も、もう近づいたんだから、あんな過去は、お互に忘れた方が男子らしいぢやアないか？

大隈 (高笑) ハッハッハッハッハッ。寧ろ口にせん方が男子らしいだらう。

伊藤 (一寸と絶句) ……君はあれから學校と政黨を造つた。……それで腰が強くなつた氣であるんだらうが、謀反人なんか養成するのは止せよ。(半ば酔つて半ば眞面目な調子)

大隈 (コップを傾け乍ら) ハハ、、、。お互に徳川幕府の謀反人だつたから、明治の御維新も、出来たんぢやアないか。世間の謂はゆる謀反人ツて奴は、いつも國家社會が腐りかけて、泥沼の様になる







ちふハといふ

もらはんにやハ  
もらはなければ

二進も三進も行  
かん。

黒田 難有う……(飲む)……大隈どん、何うしても汝が出てくれんぢや。己は伊藤どんの後を引受けて、内閣を作ることは御免蒙らんぢやならん。國會開設も直だし、それに條約改正ちふ大仕事がある。大きな難題ぢや。井上どんが癩癩を起こし、これが手を引いてから、始末が附かんことになつちよる。これは、汝が出ん事にはどうもならんぢや。是が非でも承知してもらはんにや、日本の政治は暗礁にのり上げたも同前ぢや。二進も三進も行かん。何卒ウンと云つて下さい。黒田が頭を下げて頼みますぢや。

大隈 廟堂の諸公が困つたものを、吾輩に押し付けられるぢや、今度は吾輩だけ困らさせられる事になるぢやないか。ハ、ハ、ハ、ハ、黒田 こりや國家全體の爲めなんだ。治外法權だの、關稅問題だの、これをいつまでも抛つておくのは、自分の物を盗んで行かれて

ごわせんかハ  
さんせんか。

も、指をくはへて見てゐるやうなもんぢやごわせんか。その邊の理窟は、汝方が、おいどんよりよく分かつてる筈だ。もう一日も愚圖々々しちやゐられん……(大隈の前へ來て肅然として) 大隈どん、あの北海道の官有地拂下事件ぢや。汝に己はひどくやられた。己は怨みに思つた。しかし、そんな事を根に持つちやゐられん場合ぢやから、己は斯うして汝に頭を下げる……心から頭を下げる……汝、己の此の心を汲んで下さい。黒田のこの誠心を買つて下さい。大隈どん、頼むぞ……黒田が頼むぞ。(言葉に熱誠がこもつて聲が慄へる)

伊藤 己が大隈なら、どんな理窟があつても、黒田君のこの熱誠の前には、ウンと云はにや置けないんだが……

黒田 大隈どん、黒田のこの胸を買つて下さい……おいどんと一緒に、片棒をかついで下さい。これも日本の爲めですぞ。

おいどんハわれ  
わたし。  
片棒をかつぐ。



大隈 (大きく頷いて) よろしい。… 承知した。日本の爲めに立ちませう。… しかし、我々は、今後、責任内閣を作つて、政黨政治の常道を進むといふ誓ひをしてもらひたい。… 實は、この前にも覺書はお目にかけた。(手箱から書附を取り出して、ひろげ) これへ兩君の御署名を願はうぢやアないか？

黒田 署名でも、何でもする。…

伊藤 (手早くそれを取り上げ) しかし、そんな誓約なんか、あつたつて、なくつたつて同じ事さ。お互に信じ合へば、いゝだらう。こんな水臭いものは焼いて了はうよ。(ストーヴに投げ入れる)

黒田 (興奮した調子) 伊藤どん、そりやひどい。… そんな亂暴な事をしちや、折角承知して下さつた大隈どんが、又怒られるだらう。

… コリやけしからん。…

大隈 (笑つて) まあ可い、まあ可い。紙に書いたものがアテになら

んなら… ぢや、お互の心に書き附けて了つた事にして、吾輩は起たう。… 粉骨碎身して、條約改正の事業に當たらう。

黒田 (躍り上つて) 難有う。おいどん一身のためより、國家のために、こんな嬉しい事はなか。…

伊藤 ウム、大隈が起つてくれりや、大丈夫だ。吾輩ホツとしたよ。

これで肩の重荷がとれた。(黙つて手をさしだす、黒田も一方から手をさしだし、三人堅く握手) (カーテン)

### 二三 東西文明の比較

大隈 重信

試みに西洋文明の淵源である古代希臘と、東洋文明の主なる要素を成して居る古代の支那とを比較して見ると、吾々は先づ其の外形上の特徴の彼れ是れ互に甚だしく異なつてゐる事に一驚を

大隈重信  
明治大正に亘れる元勳、侯爵佐賀の人  
大正十一年歿  
年八十五



喫せざるを得ない。蓋し希臘は地中海濱の渺たる一小島國で、之れを廣漠たる支那大陸に比較すれば、眞に有るか無きかの一小土である。希臘はその本土が狹隘な半島で、しかも山岳が多く、土地



大 除いては三方悉く海に圍まれ、  
隈 しかも小亞細亞に向つた海上  
重 には數多の島嶼を有する海國  
信 である。之れに對して支那は

民の大多數は曾て海洋を見たことがないといふほどに廣大無邊の國である。

されば單に位置面積の關係だけから見ても、希臘民族は、狹隘な本國內に居つては到底十分な生活を營むことが出来なかつたの

希臘民族は、狹隘な本國內に居つては到底十分

な生活を營むことが出来なかつたのに反して、支那國民は、本國を出でて他の領土に侵入する必要が更になく、國內に居たまま、で凡てが足りるといふ自給自足の境遇に置かれてゐたのである。

に反して、支那國民は、本國を出でて他の領土に侵入する必要が更になく、國內に居たまま、で凡てが足りるといふ自給自足の境遇に置かれてゐたのである。希臘本土の民族が可なり碻確な山間に住して、生活の爲めに絶えず努力し、絶えず外に向つて擴張を圖らなければならなかつたのに對して、支那民族は天産物に富んだ廣大な沃土に住んで居た爲め、概していへば、其の天恵を享樂し開發するだけで、殆んど外部發展の必要を感じることがなかつたのである。尤も、支那は世界の大国だけあつて、中央と邊陲とは甚だしく事情を異にし、殊に南と北とは、自然に風土、言語、人情等を異にしてゐて、一概には論じ難く、例へば北方は南方に比して、土地も瘠せ、氣候も寒く、従つて人民はおのづから勤勉努力の特徴を備へて居るといふやうな差別はあるが、概していへば、天與の樂土に安着して平和に農業を營んでゐたものと想像される。



Assyria  
Babylonia

支那上古の文明は、自發的、國內的のものであつた。

更に古代支那と古代希臘との地勢及び交通上の事蹟を比較すると、兩民族の異同は愈々著しくなつて來る。支那民族がたとひ太古に於いて、埃及、アッシリヤ、バビロニヤ等の文化から多少の影響を受けたとしても、支那上古の文明が、其の根本に於いて、自發的、國內的のものであつたこと、殊に黄河沿岸に自發したる支那本來のものであつたことは、今日ではもはや疑ふべからざる事實である。即ち古代支那に於いては、或は一局部に於いて、或は例外的に、多少他の民族との交通が行はれたとしても、大體から言へば多少文化を異にした同民族間の交通が主なるものであつたと想像される。換言すれば、主として支那中央の民族が國內に於いて著しく頭角を現はし、而して其の四隣の異族即ち謂はゆる夷狄が、屢々之れと接觸したといふに止まり、其の歴史上の活動も、大體同一民族間に於ける交通、接觸、競争、軋轢に過ぎなかつたのである。

古代の希臘は其の周圍、殊にアフリカ及び小亞細亞方面に對し、幾多の異人種、異民族と接觸し對抗せざるを得なかつた。

Phoenicia

古代の希臘は之れに對して大いに事情を異にしてゐた。彼等は、支那民族の如く、同民族間の交通接觸に甘んずる事が出來ずして、其の周圍、殊にアフリカ及び小亞細亞方面に於いて、幾多の異人種、異民族と接觸し對抗せざるを得なかつた。蓋しエジプト及びバビロニヤは希臘に對する先進の文明國で、希臘が此等の先進國から、宗教上、藝術上、科學上、顯著なる影響を蒙つた事は、今日ではもはや疑ふ餘地のない事である。嘗に藝術上、宗教上の關係のみならず、希臘が政治上、ヘルシヤと對立し、商業上、フィニシヤ族と接觸し、その他尙ほ種の異人種、異民族と交通したことは争はれない事實である。約して云ふと、古代の支那民族に取つては、支那本土の民族が世界唯一の民族であり、従つて自己のある事を知るのみで、他の民族のある事が意識されなかつたのに反して、古代希臘人に取つては、其の民族が最初から世界諸民族の一部分に過ぎなかつた。



従つて支那民族の活動が同一民族間の活動に止まつたのに反して、希臘人の活動は最初から他民族、異人種に對する國際的活動であつた。抑も同一民族間の競争、軋轢は其の國民の發達を妨げ、對外的活動は其の民族の進歩發展を助長する。これが、古來歴史上の通則であるが、此の點から見ても、古代支那が周圍の劣等民族を見下して高く止まつた爲めに、おのづから安逸に流れて激烈な競争が無くなり、従つて文化の進歩の早く停止したことが理解されるであらう。

支那文明は自發的、自生的のものであつたが、希臘文明も、自發的であつた點に於いて支那文明と揆を一にして居る。

支那文明が自發的自生的のものであつたことは、右の通りであるが、希臘文明も、自發的であつた點に於いて支那文明と揆を一にして居る。無論、希臘文明がエジプト及び小アジア等の諸先進國の影響を受けたことは明白な事實であるが、希臘文明そのものは決して單にエジプト又は小アジア文明の摸倣ではなく、純粹に希

臘獨特のものである事は、泰西諸學者の等しく承認する所である。また斯くの如く自發的の文明であつて、始めて、同じく自發的で獨特無二なる古代の支那文明と相對して、比較され得るのである。若し希臘文明に自發的特質がなかつたならば、希臘文明は偉大なるヨーロッパ文明の淵源たる資格と價值とを失ふであらう。さて此の相對して獨特無二なる東西兩文明の發生及び發達の時期を比較すると、支那文明の發源は著しく希臘文明の發生に先んじて居る。支那文明は西紀前二千年乃至それ以前に溯り得るが、之れに對して、希臘文明は西紀前七八百年乃至一千年以上には溯ることが出來ぬ。然しながらこの東西兩文明の最盛期は、其の發生期程には相違してゐなかつた。假りに支那古代文明が十分に發達した時期を周初とすれば、それは大凡西紀前一千年に相當する。また希臘文明の爛熟した時を假りにペリクレス時代とす



Pericles  
(492-429BC)  
アテネ最盛期の政治家

れば、それは西紀前四百年頃に該當する。人ていふと、孔子とソクラテスとが略同時代で、しかもその境遇に奇異な類似を見せて居るのである。

さて又東西文明發達の徑路を見ると、古代支那に於いては、大體戰國時代に至るまでの間に、文學、宗教、藝術等、一切の文化の花が十分に咲き揃つた觀があり、其の後は唯だ此等の學術思想が種々の形に於いて傳承されたに過ぎなかつた。然るに古代希臘思想の發達を見ると、其の全盛期はペリクレス時代で、凡ての希臘思想は此の時期に至つて十分開發の隆運に達したのではあるが、同時に西洋の文明は支那文明とは異なり、彼等の後にローマ民族が起こり、次ぎにヘブライ及びアラビヤ等の思想が混入し、更にチュートン民族が其の後を繼承したといふ、變化に富んだ歴史を有つてゐる。言ひ換へると、古代希臘文明は支那文明の如く其のまゝ後代

Hebrew  
Tenton

東西の思想發達上の最大相違點は、前者が先人の説を遵奉するに對し、後者が自由なる態度を以て古きに臨み新しきを發かんとしたるにある。

に傳へられずして、寧ろ様々に變形され改造されて、近代ヨーロッパ文明となつたのである。尙ほ特に注目すべきは、支那に於いては、古代思想が後世の理想と崇められ、従つて古代思想の遵奉敷衍が後世學徒の能事と考へられたのに反して、西洋に於いては、古代希臘に對して斯様な思想感情の束縛が無く、各個人が自由にその思想、學説を發表することが出來、従つて諸の學説思想が自由に歴史的に進歩し發達した形跡の著しいことである。即ち東洋の傾向が、最初から先人の説を遵奉し、墨守せんとしたのに對して、西洋の傾向は最初から自由な態度を以て古きに臨み新しきを發かんとしたる事、之れを東西の思想發達上の最大相違點といふべきであらう。

(『東西文明の調和』に據る)



# 純正國語讀本卷十終

（新刊）  
 純正國語讀本卷十終  
 編輯者 五十嵐力  
 發行者 早稻田大學出版部  
 印刷者 五十嵐良晃

昭和八年二月十七日發行  
 昭和七年十二月九日發行  
 昭和七年十月六日發行  
 昭和七年八月九日發行  
 昭和七年七月九日發行  
 昭和七年六月九日發行  
 昭和七年五月九日發行  
 昭和七年四月九日發行  
 昭和七年三月九日發行  
 昭和七年二月九日發行  
 昭和七年一月九日發行

（新刊）

純正國語讀本卷十

定價金六十錢

編纂者 五十嵐力

發行者 早稻田大學出版部

代表者 山田謙吉

印刷者 五十嵐良晃

東京市淀橋區戸塚町一丁目五十八番地  
東京市牛込區榎町七番地

複製



◆發行所 東京・早稻田 早稻田大學出版部

電話牛込三四五番・三四六番

刷印攝工町樓社會式株印本日本大



